春の鯨

キャスト

島本　緑	（しまもと　みどり）	二九歳	島本家の長女
向坂　陽子	（さきさか　ようこ）	二八歳	緑の友人　東京在住　ＯＬ
渡部　友樹	（わたべ　ともき）	二八歳	緑、陽子の友人　酒屋経営
島本　康	（しまもと　やすし）	五三歳	緑、紫の父　居酒屋経営
島本　紫	（しまもと　ゆかり）	二十一歳	島本家の次女　大学四年生
渡部　恵子	（わたべ　けいこ）	三一歳	友樹の妻　酒屋勤務
内藤　晧次朗	（ないとう　こうじろう）	五一歳	内藤家の主人　理髪店経営
内藤　房代	（ないとう　ふさよ）	五二歳	晧次朗の妻　理髪店勤務
内藤　真美	（ないとう　まみ）	一三歳	内藤家の次女　中学二年生
杉山　貴志	（すぎやま　たかし）	二七歳	緑達の後輩　保育士
後藤　亜矢	（ごとう　あや）	二五歳	貴志の彼女　家事手伝い

少年野球チーム　メンバー１・２・３・４　小学校三～六年生　早岐地区の野球チーム

少年

（開幕）

☆　長崎県佐世保市早岐（ながさきけんさせぼしはいき）　小森川（こもりがわ）沿い。

一軒の居酒屋。　そこで暮らす一家の日常が舞台。

開店前の店。そこには、一人厨房に向かう緑の姿がある。

舞台奥の自宅のほうから、連日、高校野球、春の選抜大会のテレビ観戦で盛り上がっている常連客の声がする。

その中には、康（緑の父）と、緑の友人、友樹・陽子もいる。

二〇〇六年四月四日　時刻は午後十五時の少し前。

テレビでは横浜高校（神奈川県代表。２００６年春の選抜、優勝校。）と清峰（せいほう）高等学校（長崎県代表　同年、春の選抜、準優勝高）が、死闘を繰り広げている。

地元の期待を浴びながら、清峰高校が長崎の球史に残る偉業を成し遂げようとしている、（もしくは成し遂げられなかった）瞬間であった。

緑　上がるばい。　だいか取りに来んね。

☆　緑、串をひっくり返しながら、裏の騒ぎを聞いていた。

すると、店の入り口が開く音がする。　客だと思い声をかける緑。

緑　いらっしゃい。

☆　店の入り口から、紫（緑の妹）が入って来る。

緑　…お前か。

紫　ただいま。　（真っ直ぐ店の奥にある自宅への入り口に向かいながら）

緑　おお。

紫　ね、陽子ちゃんはまだおらす？

緑　あー？　陽子は…、今夜帰るって言いよったけど。

紫　東京に？

緑　や、取り敢えず、家（うち）の方にね。

紫　ね、ね、陽子ちゃん、綺麗にならしたよねぇ。　ウチも東京行ったらさ、あがん風におしとやかになるやろうか？

緑　お前じゃムリやろ。

紫　（傘を自宅への入口の段差の上に置いて）　いや、ウチは東京行って、陽子ちゃんのごとなる。

緑　よし。　んじゃ、ウチ、ちょっと出てくるけん。

紫　そがんとこに置かんよ。　っとに、フラフラして回って。

緑　ウチは今までバイトやったと。

紫　そいで、今からどこに行くとね？

緑　すぐ帰って来るさ。　そいけん、陽子ちゃんに、まだ帰らんでって言っといてね。

紫　知らんよ。

緑　じゃあね。

☆　紫、店の出入り口から退場。　緑、引き続き串を焼き続ける。

緑　上がるばい。（奥へ声をかける）

☆　返事は無い。

緑　　鳥ももはどちらさんですか？
陽子　（自宅の方から）はーい。
緑　　父ちゃんって！　取りに来んね！

☆　陽子が自宅入り口から店へ出て来る。

陽子　ごめん、ごめん。　盛り上がってて聞こえなかった。
緑　　あのクソ親父は、なんしよるとか？
陽子　これ、持って行けばいいの？
緑　　ごめんね。
陽子　ううん。

☆　焼き鳥の皿を持って、また自宅のほうへ戻る陽子。
緑、自分用に焼いた串を食べ始める。
暫くして、陽子が荷物を持って、また店へ戻ってくる。

緑　　なんね、見よってよかよ。
陽子　うん…、私、そろそろ…、
緑　　あれ、帰るとは夜じゃなかったとね？
陽子　うん…。　でも、…あんまり長くお邪魔するのもと思って…。
緑　　何か、紫の話のあるごと言いよったけどね。
陽子　あ、ホント？
緑　　よければ、もう少し残っとってくれんね。
陽子　……。
緑　　あ、そいで、あんたなんやったと？
陽子　え？
緑　　話すって言いよったろうもん。
陽子　うん。
緑　　今なら大丈夫じゃなか？
陽子　…じゃあ、ちょっと…、時間貰っていい？
緑　　座れば？　なんか飲むね？
陽子　じゃあ、…ウーロン茶を。（カウンター席へ座る）
緑　　考えてみりゃ、あんたと飲んだ事なかったね。
陽子　そうだね。
緑　　あ、そうでもないか。高校のとき打ち上げで飲んだか。
陽子　それは、緑だけでしょ。
緑　　へい、ウーロン。（カウンター越しにグラスを渡す。）串もあるよ。
陽子　うん。
緑　　さぁて、…試合はどがんなったとかね。
陽子　いいの？　見なくて。

☆　自宅の方から、悲鳴に近い声と試合終了のサイレンが響く。

緑　　終わったごたんね…。
陽子　ははは。
緑　　ごめんね、手伝いばっかさせて。
陽子　いや、こっちこそ。　お世話になっちゃって。
緑　　そいはよかけど。…いや、でもまぁ、良くはなかね。

陽子　うん。
緑　なんね、ちゃんと話さんね。
陽子　…うん。

☆　友樹が自宅の入り口から店へ現れる。

友樹　負けてしもうたよぉ！
緑　負けたね。
友樹　もう、おじちゃん達は手の付けられんよ。
緑　そうやろうな。
友樹　陽子ちゃん、こっち来んね。
陽子　あ、私、もう帰るから…、
緑　なんね？　酒ね？　つまみね？
友樹　何で帰るとね。まだ良かたいね。
緑　さっさと注文ば言わんね。
友樹　違うさ。負けたって言いに来たと。
緑　そうね。じゃあ、さっさと戻らんね。
友樹　でも、陽子ちゃんの帰ってしまわすとやろうもん。
緑　お前には関係なかやろう。って言うか、お前も店に戻れ。
陽子　あ、いいよいいよ。　別に内緒の話って訳じゃないからさ。
友樹　なんね？　内緒の話ばするつもりやったとね。
緑　あんた（陽子）が良かなら、私は構わんけど…。
友樹　陽子ちゃん。もう東京なんか戻らんで、ずっとこっちにおったらよか。
陽子　あはは。
緑　…友樹もなんか飲む？
友樹　（陽子の隣に座る）また俺たちのチームのマネージャーばしてよ。
陽子　マネージャーか…。
友樹　そう、マネージャー。綺麗な人がベンチにおったら、それだけで選手は熱くなるとばい。
緑　お前、真面目に野球しよる人に謝れよ。
友樹　真面目にしよるさ、俺だって。
陽子　…またやりたいな。
友樹　え？
陽子　マネージャー。　緑と一緒に。
友樹　緑はともかく、陽子ちゃんが戻ってきてくれたら、
緑　陽子には、東京での生活があるやろ。
陽子　もうないの。
緑・友樹　え？
陽子　もう東京には戻らない。
緑　何で？
陽子　もう疲れた。疲れて、何にも考えられないの。気が付いたら、十年も東京にいて、
…毎日、勝手に時間は過ぎていくし…。年は取るし、赤ちゃんも出来ちゃったし。
友樹　え？

☆　自宅から康の歌（栄冠は君に輝く）が聞こえる。
どんどんと店の方へ近付いてきて、康が歌いながら店に現れる。

康　友樹！　お前、なんしよっとや？　早う戻って来い。
緑　なんの用ね？
康　負けたぞ。
緑　聞いた。

康　酒の足りんとやっか。
緑　仕事前に、あんま飲み過ぎんでよ。
康　今日は仕事せんぞ。ホラ、友樹、来い！
友樹　ちょっと待って、

☆　康、「栄冠は君に輝く」を大声で歌う。

緑　そいは夏の歌やろう。
康　そいけん、（ビールを冷蔵庫から二、三本取って）父ちゃんは、夏、甲子園球場に行くぞ！
緑　…何しに？
康　清峰ば応援しに行くとやっか。　今日から、また小森川に拝むぞ！
緑　ああ、そう。

☆　康、店の入り口に走って行き、ドアを開けて叫ぶ。

康　頼むばい！　小森川の鯨さん！
緑　やめんか！　近所迷惑やろ！　（康を止めに店の入り口へ走る。）
康　なーん。　この小森川は父ちゃんのもんばい。
緑　もー。
康　ずっと家の前にあるとやけん。
緑　そしたら、この近所の人、皆のもんたい。
康　そう！　皆で行くばい。　甲子園！　友樹も、緑も、高田さんも、内藤も。
緑　店の潰れるばい。
康　陽子ちゃんも行こうで。
陽子　あ、…はい。
緑　陽子は行かん。
陽子　……。
康　なーん、お前、そがん言い方して。
緑　父ちゃん、店は私がするけん。よかけん、奥に行って飲みよって。
友樹　あ、じゃあ、おじちゃん、俺戻るけん。
康　ごめんね、陽子ちゃん。こいはすぐこがん言い方ばするっちゃんね。
陽子　いえ。
康　ホラ、友樹。歌わんや。
友樹　うん。…歌うけん。

☆　康、『栄冠は君に輝く』を熱唱し始める。　康につられて、奥の常連達も歌い始める。
友樹は情けない苦笑いを残して、康を自宅の方へと連れて行く。

☆　暫く沈黙。　緑は黙々と開店準備を始める。

緑　……そいで？
陽子　え？
緑　相手の人は？
陽子　……。
緑　お母さんには言ったと？
陽子　…まだ…。
緑　はぁ？
陽子　誰にも言ってないよ。
緑　誰にもって…？
陽子　だから、誰にもって言ったら、誰にもだよ。

緑　はぁ？
陽子　…誰にも言ってない。
緑　何で？
陽子　何でって…。
緑　…あんた、もう少し解るように話さんね。

☆　店の電話が鳴る。

緑　あああ、もう！
陽子　話すって、…何から話せばいいかな？
緑　何って言われても…、（電話を取る）はい、『居酒屋　盗塁王』ですけど？
陽子　…怒ってるじゃん…。
緑　ああ、お前か。うん。うん。おるよ。

☆　自宅の方では、清峰高等学校の栄誉を讃え、常連客達が騒ぎ始める。

緑　（電話に向かって）え？　うん。いいよ。うん。大丈夫。はいはい。はーい。
（電話を切る）…どいつもこいつも…。
陽子　…盛り上がってるねぇ。
緑　何のあったとね？
陽子　そうね…。　何があったかは、一言では無理なの。
緑　……。
陽子　でも、緑にはちゃんと話すから。
緑　……。

☆　自宅の入り口から常連客（内藤房代）が顔を出す。

緑　（房代に気付いて）　…ん？　どがんしたと？
房代　緑ちゃん、主人の焼酎あるかね？
緑　ああ、あるよ。ちょっと待って。
房代　あら、おらっさんと思ったら、陽子ちゃんはここにおったとね。
陽子　はい。
緑　おばちゃんも飲むとね？
房代　いやぁねぇ、昼間っから。
緑　飲まん？
房代　飲むと。
緑　水でよかとやろ？

☆　房代、店へ入ってくる。

房代　ごめんねぇ。自分で持って行くけんね。
緑　つまみは？　足りとるとかね？
房代　もう、今は皆飲む専門で。
緑　あんま飲み過ぎらんごと、父ちゃんば見張っとって。
房代　（陽子に）あ、そうだ。さっきの話やけど、陽子ちゃんからお母さんに言っとってもらって良かやろうか？
陽子　え？
房代　ちょうど、電話せんばって思いよったとこやったとけど、陽子ちゃん、お母さんに会うとやろう？
陽子　まぁ…、
緑　何ね？

陽子　あ、
房代　ホラ、今度ウチの娘の結婚するって言いよるたいね。そいけん、保険の手続きばし直してもらいたかと。
緑　ああ。
房代　ちょうど陽子ちゃんにおうたし、お願いしようかと思って。
陽子　解りました。　伝えておきますね。
緑　はい。（内藤に酒を渡す。）　おばちゃん。持てる？
房代　ありがとう。そんで、なるべくなら急ぎやけん、早めにお願いしてよかやろうか？
陽子　あ、はい。
緑　あ、これ（キープの焼酎）ね、もうちょっとしか入っとらんけん、また入れるなら言うてね。
房代　あら、もうそがん飲んでしまったとやろうか？
緑　おじちゃんの一人で来よらすったいね。
房代　あら、知らんやったよ。
緑　そりゃ、おじちゃんに文句言わんば。
房代　ホントたいね。ねぇ、陽子ちゃん。
陽子　あ、はい。
房代　二人ともコッチに来んけん。　陽子ちゃんも、急におらんごとなるけん。
陽子　あ、ちょっと緑に用事があって。
緑　よかとよ。コッチはコッチで盛り上がるけん。
房代　そうねぇ。わっか人は、わっか人同士が良かもんね。友樹君もソワソワしとるし。
緑　…あいつは、いつでもソワソワしとるよ。
房代　綺麗か子のおったら、緊張さすとやろうね。ウチの主人もそうたい。
緑　何言いよっとね。おじちゃんは、おばちゃんに惚れとらすたいね。
房代　あら、もお、陽子ちゃん。緑ちゃんは、いっつもこがん調子さ。
陽子　…あははは。
緑　本当の事やろもん。
房代　そがん言うたって、なんも出てこんよ。
緑　大丈夫？　一緒に持って行こうか。
房代　大丈夫さ。おばちゃんは力はあるとやけん。
緑　早う戻らんと、おじちゃんの寂しがっとらすばい。
房代　あはははは。もう、緑ちゃん。

☆　房代、フラフラとした足取りで奥の自宅へ去ってゆく。。

緑　お母さん、…まだ保険の仕事しよらすったい。
陽子　…うん。
緑　この辺も回りよらすと？
陽子　そうみたいだね。
緑　そうみたいって、
陽子　うん。　頑張ってるみたいだよ。
緑　……。
陽子　……。
緑　あんたが帰って来とるなんか、思ってもおらっさんやろうね…。
陽子　……。

☆　緑と陽子の声に重なって、自宅入り口の奥の廊下では友樹と房代の話し声。　（会話は同時進行）

友樹　（声のみ）ああ、ビックリした。

房代　（声のみ）あら、どこに行くとね。
友樹　（声のみ）店に…、
緑　…もう、お母さんも六十近かっちゃろ？
陽子　…うん。
緑　早う、楽させてやらんばたい…。
陽子　……。

房代　（声のみ）陽子ちゃんの帰って来とるけんって、あんた、奥さんに言いつけるよ。
友樹　（声のみ）なんね？　そがんじゃなかって。
房代　（声のみ）よかね、わっか人は。
友樹　（声のみ）大丈夫ね？
房代　（声のみ）大丈夫さ。

☆　友樹、自宅入り口から店に半分身体を出して。

友樹　（廊下に向かって）しっかり持たんば、零すけんね。
緑　なんね、あんたは。
友樹　よ。
緑　あっちにおりぃよ。
友樹　陽子ちゃんの帰ったかと思って…。
陽子　まだ、話は終わってないから。
友樹　そがん思って、おいも来たとよ。
緑　あんたは関係なかやろうが。
友樹　なん言いよっとや！　聞いたからには、おいにも責任のある事ばい！
陽子　そんな、大袈裟な事じゃないんだけど…、
友樹　うんにゃ、そがん訳にはいかんよ。　陽子ちゃん！
緑　…あ、さっき貴志から電話のあったばい。
友樹　え、
緑　貴志から。
友樹　え、どこに？
緑　ここに。
友樹　なんやろか？
緑　来るって。
陽子　緑、（串）一本食べていい？　なんか、見てたらお腹すいちゃって。
緑　あんた（陽子）覚えとらんね？　貴志。
陽子　え？
友樹　…こがん時に…。　一体何しに来るとやろか？
緑　そりゃ、清峰の試合けんやろう。
陽子　貴志君って、…どの貴志君？
緑　そがん沢山貴志はおらんけど…、
友樹　覚えとらんね？　野球部やった貴志さ。
陽子　杉山君？
友樹　そうそう。
陽子　へぇー、懐かしい。元気にしてる？
緑　元気ばい。　結構ココにも来るし。
陽子　あ、そう。
友樹　今日は奥に彼女も来とる。
陽子　え、ホント？
緑　亜矢ちゃんって言うとけど、おったろ？　女の子の。
陽子　ああ。

友樹　あの、威勢の良か子たい。
陽子　へぇ、そっか。
友樹　よう尻に敷かれとる。
緑　はははは。
陽子　杉山君って優しいから、彼女を大事にしそうだよね。
友樹　そがん事なかよ。　優しかとと気の小さかとは違うたい。
緑　男の嫉妬は醜かばい。
友樹　そがんじゃなかって。
陽子　だって、杉山君、真面目だもん。
緑　そうそう。
陽子　いつも、一人できちんとグランド整備したり、マネージャーの仕事も手伝ってくれたり。
友樹　俺も、きちんとしよったよ。
陽子　うん、解ってる。
友樹　もう、陽子ちゃん、なんか冷たか。
緑　やめんね。　絡むとやったら飲ませんよ。
友樹　絡みよらん。　絡みよらんとさ、陽子ちゃん。
陽子　そっか、元気なんだぁ。当たり前だけどさ…、何か嬉しいね。
緑　あ、友樹、亜矢ちゃんに言うて来て。
友樹　そがん言うて、俺ば仲間はずれにするとやろうもん。
陽子　仲間外れ（笑）
緑　馬鹿な男やね。
友樹　…馬鹿じゃなか。

☆　友樹、フラフラとした足取りで、店の座敷に上がりこむ。

緑　寝るなって。
友樹　…ちょっとだけ…。　ちょっと待っとって、陽子ちゃん。
陽子　え？
友樹　起きたら、聞くけんが…。
緑　寝るなら奥（自宅）で寝んね。
陽子　友樹君、大丈夫？（立ち上がり、友樹に近寄る）
友樹　…陽子ちゃん。（手を伸ばす。）
陽子　（立ち止まり）大丈夫？
友樹　あああ、何でコッチに来てくれんと？
緑　やめんねって！　みっともなか。
友樹　なんがや…。
緑　よかけん、ほっとかんね。
陽子　うん。
友樹　陽子ちゃん…。（寝る）
緑　情けなか。
陽子　皆、私の知らない十年があったんだ。
緑　そりゃあ、あるよ。
陽子　やっぱり少し戸惑うね。
緑　……相変わらずやろう？
陽子　何が？
緑　…ここが。
陽子　…相変わらずって言うか…、

☆　奥の自宅から、誰かの歌う『栄冠は君に輝く』が聞こえてくる。

陽子　ただ、…昔は入れなかった所に、緑がこうやって立ってるのが不思議だし。
　酔っ払って寝てる友樹君が不思議だし。
　紫ちゃんなんて、会ったとき解らなかったもん。
緑　紫は、まだ小さかったけん。
陽子　ここで向かい合ってるのが…何かピンと来ない。
緑　……。
陽子　皆、しっかりやってるんだ。
緑　…あんたこそ。
陽子　友樹君は、いつまでもユニホーム姿のイメージ。
緑　そうね。　あんたはそうかもね。
陽子　そんで、緑はジャージね。
緑　ああ。ウチも。　あんたはジャージ姿やね。
陽子　うっそ。　もっと可愛い瞬間があったよ。
緑　試合のたんびにさぁ、ジャージで、すんごい髪振り乱して叫びよったよね。
陽子　だって、本当に興奮したんだもん。　一緒に頑張ってるんだ、って実感できたし、
　もっと皆を強くしたいって本当に思ったし。
緑　いっぱい研究したよなぁ。
陽子　合宿の時も、必死でメニュー考えてさ、一生懸命ご飯作ったしねぇ。
緑　ウチがね。
陽子　う。…緑、上手だったもんね。
緑　一応、料理歴は長いもので。
陽子　懐かしいなぁ。それにさ、皆が一斉にグラウンドに出て行く姿に、毎回胸が熱くなったもんだよ。
緑　あれは気分いいよね。　それで勝って帰って来てくれりゃ、ホント、何も言う事なかとやろうけど。
陽子　充実した三年間だったな。
緑　大袈裟やねぇ。けど、…似たようなもんか。ウチなんか、部活ば取ったら、あの辛くて長い坂道
　しか思い出せんよ。
陽子　でも、ランニングで坂を登りきったとき、一番上から見る景色が爽快なんだよね。
緑　そうやったね。
陽子　夏はセミの声がすごくてさ。　登ってる途中で、周りの音が聞こえなくなるの。
緑　セミの声はすごかったね。
陽子　冬はすぐに日が暮れちゃうしね。
緑　けど、夕日だけは綺麗やったね。
陽子　うん。グラウンドから見る夕日は、本当に綺麗だった。
緑　いやぁ、懐かしかねぇ。
陽子　東京に行っても、…最初は毎晩思い出してた。　高校三年間、本当にアレだけが私の思い出だっ
　たよ。
緑　そがん言うて貰えたら、ウチも誘った甲斐のあったね。
陽子　うん。…今でも感謝してる。

☆　緑、カウンターへ歩み寄り、何気なく陽子のバッグに触れる。

緑　こがんとこ置いとったら、汚れるばい。コレ。アッチに…、

☆　陽子、緑の手からバッグを奪い返す。

陽子　…大丈夫。ここでいい。
緑　あ、…ごめん。

☆　暫く沈黙。

陽子　……さっきの話なんだけど…、
緑　うん。
康　（自宅から）友樹！　何しよるか？
緑　あー、やぐらしか。
康　早う来い！　緑も陽子ちゃんも来い！
緑　友樹は寝とるよ。
康　なんてか？
緑　父ちゃん、もうそろそろ止めとかんね。
康　あーん？（店の方に来ながら）
緑　もう飲まんとって。
康　（店を覗く）あら、友樹は？
緑　そこ（座敷）
康　なんしよっとや。情けなか。
陽子　おじさん、飲み過ぎですよ。
康　こっからたいね。こっから夏の大会に向けて、作戦ば練らんばいかんけん。
緑　余計なお世話ばい。
康　父ちゃんの作戦も捨てたモンじゃなか。（フラフラと店に出てくる）
陽子　見とかんね、陽子ちゃん。
　　はい？

☆　康、突然サインを送り始める。

緑　…何ね、そいは？
康　盗塁のサイン。

☆　次のサインを送る。

康　送りバントのサイン。
緑　そいば…どがんすっとね？
康　選手の特徴は、父ちゃんが一番解っとる。
緑　父ちゃんがそがん事考えんちゃ大丈夫やけん。
康　甲子園で今日の屈辱ば晴らすとばい。
緑　結局、最後は何点差やったとね？
陽子　私が最後に見たときは、二十一点差だったかな…。
康　甲子園、行くぞ！
緑・陽子　……。
康　ホームランのサイン。（サインを送る）
緑　陽子、足りんやったら、豆腐とかあるけど。
陽子　あ、大丈夫。
康　（冷蔵庫に向かいながら）陽子ちゃん、コッチにおいで。
陽子　あ、いえ、お構いなく。
康　陽子ちゃんは勝利の女神ばい。（ビールを二本取る）華のあるとよ。
　　やっぱり東京人は違うね。
緑　もう、飲まんとって。
康　その調子で、夏の大会までコッチにおらんね。
緑・陽子　……。
康　ホラ、友樹、友樹って！　戻るばい！
陽子　…勝利の女神だって。
緑　負けたとに。
康　友樹！（友樹の眠っている座敷へ向かう）

緑　寝かせとかんね。
陽子　友樹君さぁ、お店いいの？大丈夫？
緑　大丈夫じゃなかよ。
康　しっかりした奥さんが、友樹の代わりにきちんと店番しよらすと。
緑　程々にしとかんと。ずっとこがん調子やったら、奥さんも怒らすって。
陽子　…そんなに来るの？
緑　ここの所異常かっさ。ずっと清峰が勝ちよったけん。
陽子　ああ。
康　（友樹を起こしながら）コイツはよかヤツよ。
緑　父ちゃんって。寝かせとかんね。
康　こいが父ちゃんの本当の息子やったら、今頃プロ野球選手ばい。
緑　あはははは。
康　ホラ、起きろ。ちゅーするばい。（友樹にキスしようとする）
緑　もう、やめりって。（座敷の方へ行き、康を止める）起きたら戻るやろうけん。
康　友樹ぃ、なして緑と結婚せんやった？
緑　うわ、何言いよっと？　やめんね！　気色悪か！
康　友樹ぃ。おいの息子になれ。
緑　ホラ、ビール持ってやるけん。
康　友樹ぃ。
緑　はいはいはい。（ビールを持ち、康を支えて自宅の方へ）
康　友樹はよか奴よ。
緑　うん。知っとる。

☆　そのまま入り口を上がり、奥の廊下へ消えていく二人の会話。

康　（声のみ）甲子園球場の似合う男ばい。
緑　（声のみ）ああ、応援席がね。

☆　自宅から、緑を歓迎する歓声が上がる。

緑　（声のみ）皆、飲み過ぎばい！

☆　店に残った陽子。大胆に寝返りを打つ友樹を見ている。
そして、カウンターに残った、冷え切った焼き鳥の串を一本手にする。
自宅の方からは騒がしい声。　それを聞きながら、焼き鳥を頬張る。

☆　友樹が目を開ける。

友樹　陽子ちゃん…。
陽子　うっ！
友樹　…大丈夫ね？
陽子　ビックリした。　起きてたの？
友樹　話してみらんね。
陽子　え？
友樹　緑には言いにくかっちゃろ？
陽子　……。
友樹　卒業式の時に言うたやろ？　おいは陽子ちゃんの為に何でもしてやるって、
　　あいは嘘じゃなかとよ。
陽子　…うん。
友樹　ずっと、陽子ちゃんの事は気になっとったとよ。

陽子　ありがとう。
友樹　ありがとうじゃなくてさ、おい、今だって陽子ちゃんの為やったら…、
陽子　友樹君。私、変わっちゃったかな？
友樹　え？
陽子　高校の時とは、もう違うかな。
友樹　き、…綺麗になったとは思うけど…。
陽子　そんなんじゃなくてさ。
友樹　そがんと、おいだって一緒たい。　陽子ちゃんだけじゃなかよ。
陽子　友樹君は変わんないよ。
友樹　おいだって、全然、上手くいかん事ばっかりよ。
陽子　…ね、友樹君の奥さんって…どんな人？
友樹　何ね、突然。
陽子　きっと優しい人なんだろうね。
友樹　…よかたいね。　そがん話は…。　今は陽子ちゃんの話ばしよるとよ。
陽子　だって、
友樹　ん？
陽子　私の話、…いい事なくてつまんないんだもん…。
友樹　つまらん事なかよ。　そがん面白か事ばっかりある訳なかたいね。
陽子　そんなの嫌じゃない。　…何か面白い話してよ。
友樹　…そがん事、急に言われても…。
陽子　じゃなかったら、（友樹の側に歩いてゆく）幸せな話をしてよ。
友樹　えーっとね…。あ、陽子ちゃん？
陽子　え？
友樹　おい、合宿の時の飯、陽子ちゃんが作ってくれよると思っとったよ。
陽子　…どこから起きてたの？
友樹　ショックやった。…まさか緑が作った飯とはね…。
陽子　友樹君、沢山食べてたじゃない。
友樹　おお。おかわりしよったよな。…俺の綺麗な思い出の一つ減ったよ。

☆

店のドアが開く。陽子は友樹から少し離れる。
陽子がそちらを見ると、入り口から貴志が入って来る。
友樹は、また寝たふりを再開する。

貴志　あ、
陽子　ん。
貴志　あ、…どうも。
陽子　…杉山君？
貴志　え？
陽子　久しぶり。覚えてる？
貴志　あ、
陽子　野球部の、
貴志　向坂さん？
陽子　うん。
貴志　あれ？…どうしたんですか？
陽子　え？
貴志　あ、いえ。　本当に久しぶりだから。
陽子　杉山君も、相変わらず…、
貴志　（店に入ってくる）いや、懐かしいです。
陽子　やっぱり大きいね。
貴志　ははは。それは変わりようがありませんから。（座敷の友樹を発見する）あれ？

陽子　あ、奥にいる人、彼女なんだって？
貴志　え、あ、はい。…まぁ。
陽子　幸せなんだ？
貴志　…いや、人並みですよ。　向坂さんは、東京って聞いてたんですけど…。
陽子　うん。
貴志　まさか、ここで会えるとは。
陽子　ビックリした？
貴志　はい。
陽子　あ、どうぞ。　奥に行くんでしょ？
貴志　え？
陽子　緑も奥にいるし。…あ、友樹君は今ちょっと、
貴志　でも、せっかく向坂さんと会えたんで…。

☆　貴志、座敷に腰掛ける。

貴志　…もしかして、迷惑ですか？
陽子　何で？　そんな事ないよ。

☆　暫く沈黙。陽子と貴志、並んで座り、自宅から響く騒ぎ声を聞く。

陽子　……清峰、負けちゃったね。
貴志　そうですか。
陽子　…あれ？　試合、見てた？
貴志　いや、今聞きました。
陽子　あ、ごめん。
貴志　ははは、いいんですよ。ちょうど仕事で見れなかったんです。
陽子　…仕事は、何してるの？
貴志　保育士です。
陽子　え、本当に？
貴志　はい。…でも、今はどこも園児が少なくて。なんで、パートなんですよ。
陽子　何となくだけど、似合ってるね。
貴志　よく言われます。
陽子　でしょ。
貴志　今日は子供たちと野球をしてて、紙で作ったバットとボールなんですけど、
陽子　俺、久々にヒット打ちましたよ。
貴志　うん。
陽子　メチャクチャなんですよ。俺がファーストまで行ったら、守備の子がベースを
貴志　持って逃げるんです。
陽子　あはははは。
貴志　絶対踏めないんですよ。
陽子　一番の守備だね。
貴志　参りましたよ。そんで、そうこうしてる内にボールが返って来ちゃって。
陽子　今度は、皆が俺を追い掛け回すんです。
貴志　そしたら、野球に詳しい園児がいて、『もっとちゃんとしろよ』って怒り出して。
陽子　でもさ、野球がそんなルールだったら、ウチも一回くらいは甲子園に行けてたかもね。
貴志　体力持ちませんよ。
陽子　高校生の頃は、走り回るのも楽しかったけどね。
貴志　でも、そんなメチャクチャなルールだったら、俺も試合出れたかもしれませんしね。

陽子　……。
貴志　あ、いや、違うんですよ。別に変な意味じゃ。
陽子　うん。解ってるよ。
貴志　ただ、今日園児達と野球やってみて、…ホントに楽しかったんで。
陽子　杉山君、…コーチとか向いてるかもよ。
貴志　実は、少年野球チームから、手伝ってくれって頼まれてるんですよ。
陽子　そうなの？
貴志　…まだ返事はしてないんですけど、
陽子　いいじゃん。
貴志　色々考えてから決めようかと思って。いくら小学生でも、俺、多分体力で負けてますからね。

☆　緑が手にビールの入ったグラスを持って、奥の入り口から店に戻ってくる。

緑　話し声がすると思ったら。
陽子　あ、何、結局飲んでるの？
緑　一杯だけね。無理矢理飲まされた。
貴志　お疲れ様です。
緑　亜矢ちゃん、奥におるよ。
貴志　はい。
緑　あ、何か飲み物持って行くね？
貴志　あ、じゃあ、ウーロン茶を…、
緑　奥に行ったら、絶対飲まされるよ。
貴志　車なんですよ。
緑　そうね。ちょっと待っとって。
陽子　そっか、当たり前だけど、車運転するんだ。
貴志　ないと不便なんですよ。
緑　徒歩じゃ下界には出られんもんね。
陽子　あー、まだ実家に居るの？
貴志　はい。バスも年々減って行くし。　それに、この間なんか、狸が出ましたからね。
陽子　狸？
緑　はい。（ウーロン茶を貴志に渡す）どうぞ。
陽子　あの辺って、狸が出るの？
緑　この辺にもおるよ、多分。
貴志　じゃあ、ちょっとお邪魔します。
緑　うん。

☆　貴志、ウーロン茶を持って自宅の方へ。

緑　大丈夫かな、亜矢ちゃん、相当飲んどったけど。
陽子　何か、杉山君、大人っぽくなったね。
緑　そりゃ、あんた。もう二十八ばい。
陽子　そうだけどさ、昔から落ち着いてはいるんだけど、何か自分より大人って感じがする。
緑　色々キツイ思いもしたやろうし。　達観しとるって言うか。
陽子　…もう、野球できないのかな？
緑　え？
陽子　杉山君。…すごく上手だったのに…、残念だよね。
緑　ホントね。
陽子　時間が経てば…、ひょっとして足が良くなってるんじゃないかって、

緑　……。
陽子　でも、本人が元気そうで、ホッとした。
緑　…そこで引っ繰り返っとる、無駄に健康な男に爪の垢ば煎じて飲ませたかね。
陽子　…あ、ねぇ、緑。友樹君と縁談があったの？
緑　はぁ？
陽子　おじちゃんが、さっき言ってたじゃん。
緑　違う。あいは父ちゃんが勝手に言いよると。
陽子　なぁんだ。
緑　にしても、落ち着かんね。
陽子　え？
緑　あい（友樹）がそこで寝とったら、何かゆっくり話されんし。
陽子　ああ、…そうね。
緑　今日は…日の悪かったかな…。
陽子　ごめんね。コッチがこんなに盛り上がってるとは思ってなくて。
緑　あんた、全然高校野球なんか見よらんやったろ？
陽子　う、そうね。全くソレどころじゃなくってさ。
緑　ウチの周りに野球狂いしかおらんけんやろうかね。何か、野球のない生活って
陽子　ウチがピンと来んちゃんね。
緑　（笑）確かに。
陽子　なんせ、盗塁王やしね。
緑　友樹君も、相変わらず人が変わったように応援してたしね。
陽子　自分の家で見りゃ良かとに。
緑　…緑と一緒がいいんじゃない？
陽子　やめんね。そがん事言うなら、ウチも言わせて貰うばい。
緑　え？
陽子　色々聞いたよ。
緑　ん？
陽子　高校時代の友樹との話さ。
緑　ああ、…まぁ、昔の話ですから。
陽子　二年の時の練習試合で、
緑　え？何？
陽子　この試合に勝ったら、陽子ちゃんに告白するって言うて。
緑　この試合に勝ったら？…そんなんあったっけ？（友樹に）

☆　友樹が起き上がる。（寝たふりを止める）

緑　あ、何や？
友樹　……水…、水くれ。
緑　ウチは水はセルフですんで。
友樹　…何てや？　死ぬばい。
緑　飲み過ぎですよ。お客さん。
陽子　大丈夫？
友樹　大丈夫じゃなかよ。
緑　気色ん悪か。ソフトドリンクは三百円ですけど？
友樹　お前…、
緑　水はセルフです。
友樹　…ウーロン。
緑　まいど。
陽子　少しはお酒抜いて帰らないとね。
緑　ジョギングして来い。

友樹　殺す気か？
緑　何がお前さんをそんなに飲ませるのかね。

☆　友樹、フラフラと二人のいるカウンターへ。

友樹　野球への思いが…。
緑　アホかよ。　今、お前の恥ずかしい過去ば、赤裸々に明かしよったところばい。
友樹　…ああ。
緑　でも、こがんしとったら、何か今が変な感じよね。自分じゃなんも変わっとらんつもりけど。
友樹　お前は何も変わらんやっか。
緑　何も変わっとらんやったら、それこそ問題ばい。
陽子　でも、…一生大人になれる気はしないな…。
緑　何を言うか。若ぶるな。もうすぐ三十路ばい。
陽子　お互い様じゃん。でもさ、ホント、この辺りも随分変わったよね。
緑　スッキリなったろ？
陽子　小森川、大きくなってない？
友樹　やっぱ、そがんせんば、鯨のおられらっさんけんね。
陽子　（笑）まだ鯨がいるの？
友樹　おらすさ。ずっとおらすと。
陽子　ねぇ、学校の辺りは、昔と変わってない？
友樹　ああ、あの辺も、すっかり住宅地になっとるけん変わったよ。
緑　そいに、野球部もあってなきが如しばい。
陽子　えー？　ヤダ。
友樹　やっぱり、よか監督のおらんぎんたね。
緑　そうばい。やっぱ清峰も、まず監督がよかもん。
陽子　ねぇ。ビックリしたよ。元の北松南（清峰の旧名の通称）なんでしょ？
緑　急に上がってきたけんね。
友樹　やっぱ甲子園とか行くっちゃ、並み大抵じゃなかよ。
緑　そりゃ、地区大会はダレでも出れるけんね。
陽子　確かに…、ウチの野球部は…監督も多少問題があったかもね。
緑　そしてエースにも…。
友樹　おいはそこそこやれよった。
緑　お前はプレッシャーに弱すぎ。
陽子　ああ。ね。
友樹　ね、じゃなかよ。陽子ちゃん。
陽子　でもさぁ、一回でいいから甲子園行きたかったね。
緑　ムリムリ。どがん考えても無理やろう。
陽子　そりゃね、まぁ。
友樹　何ね、その言い方。その夢は、清峰が叶えてくれたやろう。
緑　あんまり『ヤッター！』って記憶のなかよね。
友樹　あるばい。一回勝ったやろうもん。
陽子　ああ、あの歴史的勝利の日？
緑　あいは、ウチと陽子の願掛けのおかげばい。
陽子　確かに…、毎日…緑に言われて強制的に小森川の鯨さんに拝んでたけど…。
緑　ご利益のあったやろうもん。
陽子　けど、…あの試合以外でも願掛けしてたのに…。
友樹　…鯨は気まぐれやけんね。
緑　違うばい。
友樹　え？

緑　あん時は確か…、すごい奴のおったとよ。
陽子　え？
緑　だって、あいは貴志が抜けた後の春季の地区大会やったろ？
ウチら明らかに部員数の足りんやったとに試合したたいね。
陽子　え？
緑　覚えとらん？
友樹　貴志が抜けたとは…、一年の秋かね？
緑　そいけんウチらが三年になったの時の春季大会さ。選手八人、マネージャー二人。
陽子　待って、…あと一人は…？
友樹　…おいと朝永の黄金バッテリーと、
緑　貴志が抜けとるけんが、…貴志はショートやろ？
陽子　ショート抜きで試合なんて有り得ないもんね。
緑　そもそも、八人で試合も有り得んしね。
陽子　でも、あの頃は野球部おかしかったもんね。何か、もう一人いるって感じで。
身に覚えのない事が続かなかった？
緑　そう言えば、そうね。
陽子　知らない間に、ユニホームが綺麗に洗濯されてたり。
緑　監督のぎっくり腰が、一日で治ったり。
陽子　絶対間に合わないと思ってた千羽鶴が、試合の日にきちんと出来上がってたり。
緑　折れたバッドが元に戻っとったり。
友樹　八人で試合したり。
緑・陽子　地区大会で一勝したり。（友樹を見る）
友樹　そいは、おい達の実力やろう。
陽子　でも、その不思議な現象の後には、必ずボールが一つ残ってるの。
緑　そうそう。
陽子　そっか。きっと神様が見ててくれたのかも。
緑　いや。きっと鯨ばい。
友樹　おお、そうばい。
陽子　だって、毎日拝んでも、鯨さんは甲子園に連れてってくれなかったよ。
緑　だけん、甲子園に連れてってくれん代わりに、千羽鶴折ったり…、
陽子　だったら、甲子園の方が良かった！
友樹　でも、一勝したたいね。
緑　お前、自分の手柄のごと、すんごい自慢しよったもんな。
友樹　あ、陽子ちゃん。あの時のウイングボール、大事にしとる？
陽子　あ、うん。
緑　あの勝利は、謎のショートのおかげやったとばい。
陽子　…そうだ。確かに居た。すごい動きをするショートの子が！
緑　やろう？
陽子　でも、全然、誰だったか覚えてないよ。
緑　けど、間違いなく、うち達ば勝利に導いてくれらしたとよ。
友樹　おいも活躍したやっか！　相手の四番バッターから三振ば取ったやろうもん！
緑・陽子　ああ。
陽子　確かに、あれはすごかった。
緑　あの時は、ウチもはじめて本気で友樹ば応援したよ。
友樹　何か、乗り移った感じのしたもんな。
緑　そうね。
友樹　いつもは緊張で力んでしまうとけど、あん時は体が軽かった。
緑　そいけん、そいは小森川の鯨のおかげやろう。
友樹　おいの実力って！　あれがあるけん、この先、どがんピンチでも切り抜けられるとばい。
緑　ホラ、なんか小柄な奴やったよね？

陽子　そうそう。　何か、可愛い感じだった。
友樹　ちょっと待てよ。（立ち上がる）こう、俺が構えた時（マウンドで構える身振り）、そこ（ショート）におったヤツやろ？
緑　思い出さんね。何か気持ち悪か。
陽子　何でだろう？　他のことはちゃんと覚えてるのに。
緑　ショートだけ、モヤのかかっとるごたん。

☆　三人の心が、あの日の試合に飛ぶ。　陽子はスタンドで応援し、緑はベンチから
　　檄を飛ばしていた、あの、初めての勝利の日。
　　併せて、店の入り口から、少年野球チームが並んで入って来る。
　　その現実をよそに、三人は思い出の中に入ってゆく。

陽子　私、スタンドで応援してて、
緑　バッターが、ここに立って。（緑、バッターボックスと見立て、友樹と向かい合って立つ）
友樹　俺が、四番ば三振。
緑　そいはよかさ、
陽子　問題はショートの子だよ。
友樹　俺が、こう投げて、
緑　打たれて、
陽子　ショートがキャッチ。
友樹　俺が投げてる、こっち側に、
緑　打たれて、
陽子　ショートがキャッチ。　私、友樹君、打たれ過ぎ！って、言った。
緑　ウチらのリードで迎えた九回裏。ツーアウト満塁のピンチ。
友樹　朝永のサインはアウトコースのストレート。
陽子　それは、一番友樹君が打たれる球なのに！
友樹　でも、おいは体の軽かった。
緑　バッター構えて、
友樹　俺が振りかぶって、
緑　打たれて、
陽子　ショートがキャッチ。

☆　試合終了のサイレン

友樹　ヤッターって手を挙げたら、ショートが投げたボールが、俺のグローブに
　　飛び込んできた。
緑　そいが唯一のウイニングボールたい。

☆　三人は、あの日の感激を胸に、頷き合う。　…が、ショートを守っていた男の子の
　　顔を思い出せず、眉を潜める。

緑・陽子・友樹　…あれ、…誰だ？

☆　三人の回想を破るように、少年野球チームのメンバーが口を開く。

メンバー1　こんにちは。

☆　緑たちが入り口を見ると、いつの間にか、少年野球チームのメンバー達が五人立っている。
　　そこには、緑や友樹の見慣れた顔があり、二人は喜んで招き入れる。
　　だが、行列の一番最後の子供（少年）は、友樹たちの知らない顔だった。

友樹　お！　どがんしたとや、お前達？
メンバー1　せーの。
メンバー全員　募金、お願いします。
緑　何ね、また募金か。
メンバー2　今度九州大会に行くことになりました。
友樹　おお、お父さんに聞いたぞ。すごかやっか。
緑　ちょっと待っとかんね。（自宅の方へ声をかける）父ちゃん！
陽子　すごいね。九州大会、どこであるの？
メンバー2　…おばちゃん、ダレ？
陽子　う、おばちゃん。
友樹　こら、この人はお姉さんやっか。
メンバー1　知らん人ばい。
友樹　おじちゃんたちのお友達。
メンバー2　じゃあ、募金お願いします。
陽子　あ、はいはい。（バッグから財布を出す）
緑　（自宅の入り口まで行き）父ちゃん！　ちょっと来んね！
友樹　お前ら、ちゃんと練習しよっとか？
メンバー2　しよるばい。
緑　（廊下を覗きながら）はよ来んね。

☆　康、自宅入り口から店を覗く。

康　なーん、どがんした？
緑　吉村さんとこの息子が、金ば集（たか）りに来た。
康　あん？
メンバー全員　募金、お願いします。
友樹　ホラ、気前のよかおじちゃんの来たばい。
メンバー1　今度、九州大会行きます。
康　うん。頑張れよぉ！
メンバー全員　はい。
緑　幾らね？　幾ら欲しかとか、お前らは。
メンバー3　出来るだけ沢山。
緑　沢山ってばい、父ちゃん。
康　そがん、沢山はやりきらんけど、（レジを覗く）
友樹　九州大会って、どこであるとや？
メンバー4　大分！
友樹　大分ぁ？　大変かね。
康　お父さんとお母さんも応援に行かすとやろう？
メンバー1　おいの父ちゃんは来らすばい。
緑　勝って来いよ。
メンバー全員　はい。

☆　友樹、康、陽子、同時にお金を出す。
康→五千円　陽子→五千円　友樹→硬貨。

康　そいはなかやろ、友樹。
陽子　友樹君。
緑　友樹…。
メンバー全員　おじちゃん。

友樹　…解っとるよ。　（財布から慌てて千円札を五枚程度出す）

☆　笑い合いながら、康と陽子と友樹は出募金箱へお金を入れる。

メンバー全員　ありがとうございます。
緑　今日はあんた達だけで来たとね？
メンバー１　父ちゃんは、外で車に乗っとる。
友樹　なるほど。子供に行かせるのが一番集まるよな。
康　何や、父ちゃんも来とるとや？
メンバー１　うん。
康　そいなら、挨拶してこようかね。

☆　康、店の出入り口から外へ。

緑　奥に行かんね。まだもう少し貰えるかもよ。
メンバー２　マジ？　じゃあ行く。

☆　メンバー２が自宅の入り口の方へ走る。　少年野球チームは、全員それに続く。

メンバー１　（友樹に）おじちゃん、今日お店は？
友樹　うん？　今日はお休み。
緑　休むな。
友樹　今日はめでたい清峰の決勝戦やけんね。
メンバー１　清峰、カッコよかよね。おいね、有迫選手（清峰のエース）のごとなりたかっちゃん。
友樹　おお。　カッコよかよなぁ。そっか、お前ピッチャーか？
メンバー１　うん。
メンバー２　高校生になったら清峰行って甲子園行くばい。
友樹　おお。よかやっか。
緑　おじちゃんは酔っ払っとらすけん、あんまり相手にせんちゃよかよ。
メンバー３　酔っ払い？
緑　あはは。　子供に言われたらきつかね。
友樹　今日はめでたかけんよかと。
緑　そっから入っていけば、中に人のおらすけん。
メンバー２　はーい。
緑　沢山もらっといで。
メンバー１　はーい。

☆　少年野球チーム、全員奥の自宅へ入っていく。
自宅の方で、それを迎え入れる歓声が上がる。

緑　大変かねぇ、少年野球も。
友樹　あいは引率するとも大変かとばい。
陽子　皆、早岐の子なの？
緑　そうじゃなかかね。
友樹　あのピッチャーの子がね、商店街の吉村米穀店の息子ばい。
陽子　ああ、商店街のチームなの？
友樹　あの界隈やけど、
緑　何か知らん子も混じっとるけどね。

友樹　もうそろそろ、あの辺も小学生は少なかけんが。
緑　そうね。…そう言えば、ついこの間までメンバーの足りんって言いよったね。
友樹　ああ、そうね。
陽子　ははは、人事じゃないね。
緑　ホントばい。せめて少年野球でも盛り上がってくれとかんとねぇ。

☆　店の出入り口が開く。紫が走って入って来る。

緑　…何だ、お前か。
紫　匿って！（カウンターの裏に入る）
☆　続いて、康が店の出入り口から入って来る。
康　こりゃ！　紫！
緑　お、
友樹　どがんしたとね、おじちゃん。
康　紫の来たやろうもん。
緑　うん。　奥に行ったばい。
康　いっちょん父ちゃんの言う事ば聞かん！
友樹　奥に行ってみらんね。
康　もうちょっと父ちゃんにニコニコできんとかね。
緑　いつもの事やろうもん。
康　ねぇ、陽子ちゃん。
陽子　あ、はは。
康　ありゃ、あいつら（少年野球チーム）は帰ったとか？
緑　え？
康　まさか、この店は次々に人の消えていく、恐ろしい何かが…、
緑　奥に行ったばい。　募金の続きで。
康　奥？　そがん沢山、奥に人の入れるとや？
緑　さぁ？　入ったっちゃなか？　皆奥に行ったもん。

☆　康、自宅の入り口へ。廊下に身を乗り出し奥（自宅の方）を覗く。

康　いやぁ、大変かねぇ、少年野球も。
緑　おるやろ？
康　おるおる。戻られんばい。
陽子　募金でお金集めるんだね。
友樹　子供が来たら、中々断れんよね。
緑　断らんちゃよかろうもん。

☆　自宅の方から、亜矢と貴志に誘導され、少年野球チームが出てくる。
康　どがんや？　沢山もらったや？
メンバー1　うん。皆、沢山やらした。
康　そうや。　父ちゃん、外で素振りしよったばい。
緑　何で素振り。
メンバー1　ありがとうございました。

☆　メンバー1に続き、メンバー2、3，4、少年がゾロゾロと店へ出てくる。

貴志　あ、友樹先輩、起きたんですね。
友樹　よぉ。

☆　少年野球チーム、整列。

メンバー1　じゃあ、頑張って九州大会行って来ます。
康　　よし。
☆　康、緑、友樹、陽子、貴志、亜矢が、少年野球チームに拍手を送る。
メンバー全員　ありがとうございました！（脱帽して、一礼）
☆　少年野球チームは、小走りで店の出入り口から退場。
見送りをするため、康、貴志、亜矢、友樹がチームの後について店を出る。

緑　　（声のみ、店の出入り口奥から）頑張れよ。
友樹　　（声のみ）優勝したら報告に来いな。
メンバー1　（声のみ）うん。おじちゃんもお店頑張って。
亜矢　　（声のみ）気を付けてね。
メンバー全員　（声のみ）はい。
☆　少年野球チームの退場に便乗するように、紫が家のほうへ避難する。

緑　　こら、お前（紫）、
紫　　トイレ！
☆　紫、自宅入り口へ上がって、靴を持って自宅の方へ走り去る。

緑　　あいつは、もう。
陽子　本当に賑やかだね。
緑　　ああ、ごめんね、ホント。
陽子　賑やかって、こういう事なんだね。
緑　　ここは極端かもしれんけどね。
陽子　緑。私、またここに戻って来れるかな？　緑の隣にいてもいいかな…？
緑　　…え？
陽子　まだ、ここに私の居場所ってあるかな…？
緑　　どがんしたとね？
陽子　…この子の父親ね、死んじゃったの。
☆　入り口から康たちの話し声。それぞれに話しながら、店へ戻ってくる。

貴志　でも、九州大会ですよ。　すごいですね。
亜矢　いいなぁ。　私も応援行きたい！
康　　そいけん、今年の夏は甲子園球場行くばい！
亜矢　甲子園なら、こまとま（駒澤大学付属　苫小牧高校）の試合見たい！
貴志　それ、違う、
康　　亜矢ちゃん！応援するなら長崎やろうもん！
亜矢　するけど、ちょっとくらいよかたいね。だって、今回は見られんやったもん。
友樹　夏は苫小牧も出るやろうしね。
亜矢　出ますよ！出るに決まっとるたいね！
康　　苫小牧は、アレばい。神宮大会で清峰ば敗った、にっくき相手ばい！
亜矢　何ね！仕方なかでしょ？
友樹　ああ、…思い出したくもなかね。あの日の亜矢ちゃんとおじちゃんの言い争いを。
貴志　…とまこまの事になったら、ちょっと彼氏としても引きますもんね。

亜矢　（貴志の頭を鷲掴みにして）　『こ、ま、と、ま』　『こまとま』ばい！
貴志　ああ、…俺、今何て言った？
亜矢　あんたバカじゃなか？　『駒澤大学付属苫小牧高校』ばい？
とまこまじゃ、何の略にもなっとらんやろう。
貴志　ホラ、ホラ！　亜矢ちゃんはおいより田中（駒苫のエース）が大事かっちゃろ？
亜矢　呼び捨てにせんと！
友樹　そがんとどっちでもよかたい。
康　おいは長崎県勢しか応援せんぞ！
亜矢　夏、こまとまと智弁が当った暁には対決ですよ！（緑が心ここにあらずなのに気付き呼びかける）
緑さん！
緑　おお。…そうね。そいは受けて立つばい。
康　お前も、まだ智弁とか言いよるとか！
緑　それは譲れんね。
康　忘れろ！　智弁和歌山の事なんか！
緑　よし。そがん話は奥に行ってからやって下さい。
亜矢　緑さん、こっち（自宅）来て盛り上がりましょうよぉ。
貴志　あ、亜矢ちゃん。紹介しとくよ。
亜矢　ん？
貴志　おいの高校の時の野球部のマネージャーさん。
陽子　あ、はい。
亜矢　うん。とっくに聞いたけど。
貴志　あ、そう。
康　なら、父ちゃんは戻るばいね。

☆

康、誰からも返事を貰えず、寂しく自宅の方へ。

陽子　杉山君が来る前から、一緒に奥で試合見てたから。
亜矢　どこの応援ですか？
陽子　え？
亜矢　今日は清峰やったけど、好きな高校どこですか？
緑　あ、亜矢ちゃん、コイツ（陽子）はね、
貴志　あ、すみません。この人、すごい高校野球ファンで。
陽子　そうみたいだね。何か、緑みたい。
緑　まぁ、…そうなんよ。ウチが一番のライバルと認めとる相手さ。
亜矢　だって、緑さん智弁和歌山応援するんですもん！
緑　いいたいね。自分も苫小牧応援しよるやろうもん。
亜矢　いや、どこも好きなんですよ。でも、こまとまが、かなり好きっていうか。
友樹　夏は行くとや？
亜矢　どこに？
友樹　試合、応援に。
亜矢　地区大会から、行ける時は行きますよ！
貴志　ほどほどにね…、
亜矢　去年もバッチリ行きましたもん！　あ、見ます？（陽子に写真を見せるため、ポケットから携帯を出す）
陽子　何？
緑　よし。お前ら。そがん話は奥に行ってからやらんね。
陽子　いいじゃん、緑。
緑　でも、
陽子　楽しいよ。
友樹　亜矢ちゃんの宝物攻撃ばい。陽子ちゃん。

亜矢　有迫選手、大激写です！
陽子　へぇ。すごいね。
亜矢　広滝君（清峰の四番バッター）のショットも！ホラ、次！吉田監督（清峰野球部の監督）のショット！
陽子　あ、この人が監督？
貴志　吉田監督に握手までしてもらったんですよ。
亜矢　早く夏にならないかな～！
貴志　亜矢ちゃん、飲み過ぎって。
友樹　そのテンションで、おいのチームも応援してほしかね。
亜矢　してますよぉ。勝ってくれなきゃ面白くないです。
友樹　こら、お前。
陽子　あら、友樹君は、相変わらずの活躍ですか？
緑　相変わらずよ。そこには高校の時と変わらん友樹が。

☆　店の入り口が開く。

緑　いらっしゃい。

☆　紫が店の中に現れる。

紫　紫ちゃんだよー。
緑　…お前は、一体何ばしよるとか？
紫　だって、そっち（自宅）ば通ろうと思ったら、茶の間から父ちゃんの声のしよったけん。
　　鉢合わせになりとうなかもん。　そいけん、店の方に回ってきたと。
緑　今日は何ばしたとか？
紫　なんもしとらんよ。　大体、さっきもさ、家から入ろうと思ったけど、ヤバイ騒ぎ声の聞こえるけんが、わざわざ店に回ったとにさ、結局そこ（店の表）で父ちゃんと鉢合わせたい。
友樹　おじちゃんば邪険にすんなさ。
紫　酒臭っ！　飲み過ぎばい！毎日毎日。みっともなか。
陽子　素朴な疑問なんだけどさ…。友樹君のお店って、そんな暇なの？
友樹　そがんじゃなかけどさ。店番は一人おれば充分やけん。
紫　そいけんって、奥さんにばっか店番させて。
緑　急に配達の入ったらどがんすると？
友樹　ウチんとも配達くらい行ききるばい。
緑　そうね。じゃあ、ウチの分もお願いできるやろうか？
友樹　おぉ。何のいると？
緑　あんた達が昼真っから飲みよるビンビール。もう一ケースお願いしたかとけどね。
友樹　あとで電話しとく。
緑　早めに頼むばい。今日は多かろうし。
亜矢　でも、大事な決勝戦やもん。仕事どころじゃなかですよねぇ。
緑　店の潰れたって、野球は責任取ってくれんぞ。
貴志　先輩、今度はいつ練習ですか？
友樹　ん？
貴志　先輩のチームの練習ですよ。最近行ってなかったんで、今度、是非。
亜矢　せっかく清峰フィーバーなんですから、友樹さん達も試合やりましょうよ！
友樹　試合の予定はなかけど、練習は…練習も、…その内連絡の回ってくるやろう。
貴志　そうですか。皆さん忙しいんですね。
友樹　まぁ、野球だけじゃなかけんね。
亜矢　大体、試合せんでどがんすっとですか。

友樹　そがん事、監督に言うてくれよぉ。
亜矢　目標がないと練習に身が入りませんよ。試合しましょう！　試合！
陽子　ホントに、…野球好きなんだね。
亜矢　はい。大好きです。
紫　なんね。皆ここで清峰ば応援しよったと？
貴志　俺は後から来たんだけどね。
亜矢　ウチは昼前からおった。
貴志　ごめんね、いつも。
紫　そいぎん、亜矢ちゃんはウチの子になればよか。
亜矢　え？
紫　そんだけ野球好きなら、姉ちゃんも父ちゃんも喜ぶよ。
緑　なんば言いよるとね。そいよりも、今日は父ちゃんの使いもんにならんけん、あんた暇やったら手伝いよ。
紫　え？　いやばい。ウチは夜出かけると。
緑　またぁ。いい加減にせんね。
紫　よかたい。今日も野球の話やろ？どうせ、知っとる人しか来んっちゃっけん。
緑　知っとる人やろうが何やろうが、客やろうもん。
亜矢　あ、私入りますよ。今日は何も予定ないし。
紫　ホラね。亜矢ちゃんの方がアテになるっさ。
緑　バカか、お前。
友樹　夜遊びはいかんよ。
紫　昼間っから飲んでるよりマシです。
友樹　お前、やっぱ姉ちゃんと言う事同じやね。
貴志　多分、一般論じゃないですか？
陽子　ぶ。
友樹　そいけん、今日は特別って。
亜矢　そう。特別って。
紫　亜矢ちゃんも飲んどるとね？
亜矢　清峰対横浜やけん。
緑　ホラ、亜矢ちゃん、水やるけん、少し酔いば醒まさんね。
友樹　あ、なんや。水はセルフやろうもん。
緑　うるさい。男がみみっちい事言うな。
亜矢　ありがとうございます。
紫　いいね。友樹君は毎日特別で。
友樹　そうばい。大人は毎日特別かったい。
緑　そいぎん、亜矢ちゃん、手伝ってもらってよかね？
亜矢　いいですよぉ。何時に開店します？
緑　ってか、もう皆飲みよるしね。今も開いとる状態と変わらんけど。
貴志　…え、じゃあ、どうする？　夜にまた迎えに来ようか？
亜矢　なんね。あんたもおりぃよ。（座敷に上がりこむ）
貴志　でも、おいは飲まれんけんが、
亜矢　（座敷に寝そべりながら）緑さん、ちょっと一眠りさせてください。
緑　こら、奥へ行け。
亜矢　ちょっとだけ。
貴志　また夜に来るけん。
陽子　あ、私も少しくらいなら手伝えるけど…、（カウンターに入る）
紫　そいより父ちゃんも働かせんば。大体、何で飲ませるとね？
緑　勝手に飲みよると。あ、じゃあ、陽子、この辺の皿ばなおしてもらってよかね。
陽子　うん。

緑　あんたこそ、一日出っ放しで、たまには家（いえ）の事もせんね。
紫　ウチはバイトやったと。遊びよる訳じゃなかとやけん。
緑　何て親不孝なヤツやろうね。
紫　あがん飲んだくれ。ウチの知った事じゃなか。
友樹　きつかな、お前。
貴志　ホント。娘に言われたくない言葉ですよね。
紫　ウチだって、別に普通のお父さんならこがん事言わんよ。
友樹　普通って、
紫　友樹君もね、奥さんば大事にせんぎん、言われるとよ。
友樹　余計なお世話ですばい。

紫　そがん狂ったごと飲んで。ウチにはそがん人しか来ん。そいが嫌（いや）っさ。
緑　ウチは東京行って、色んな人たちと知り合いたかと。
友樹　そがん言うて、遊びたかだけやろう。
紫　そがん遊びたかとやったら、外でバドミントンでもすればよかやっか。
陽子　そがんじゃなか。もー！　ねぇ、陽子ちゃん。
紫　ん？
陽子　やっぱ東京は違うやろ？オシャレかとこに遊びに行くとやろう？
紫　んー、そんなんばっかりじゃないけどね。
友樹　会社帰りに、オシャレして飲みに行ったりさぁ。
紫　バカね。陽子ちゃんは遊びに行っとらした訳じゃなかとばい。
陽子　解っとるさ。けど、ずっと仕事しよる訳じゃなかやろうもん。
紫　そりゃ、会社帰りに飲みに行ったりもあったけど。
陽子　いいなぁ。
紫　でも、そんなのこっちと変わらないよ。ちょっとコッチより便利なだけで。
貴志　嘘。全然違うやろう。
友樹　そりゃ、東京と比べたら全然違うさ。
紫　そがんとの何がよかとか。
陽子　ねぇ、陽子ちゃん。今日こそはお父さんば一緒に説得してよ。
緑　え？　ああ…。
紫　そがん、陽子は関係なかっちゃけん、変なか事ば頼まんと。
友樹　変なか事じゃなか。
紫　何ば説得するとか？
友樹　ウチ、卒業したら東京行きたかと。
貴志　あぁ、
紫　え？　ホント？　何で？
緑　自立した女になるっちゃん。
貴志　親父が反対しよるっさ。
陽子　そうでしょうね。東京は遠かもん。
紫　でも、他人の私が口を出すのもね…。
緑　そがん事なかよ。経験者が一緒に説得してくれた方がいいもん。

☆　店の電話が鳴る。

緑　はいはいはい。（電話のところへ）
陽子　紫ちゃんが真剣に話せば、ちゃんと聞いてくれると思うけどね。
緑　はい、『居酒屋　盗賊王』ですけど？
紫　…そうかね？
緑　あ、どうも。はい。あ、やってますよ。

紫　清峰が勝ちよる内に話しばしようと思っとるとけど…。
緑　あー、はい。奥で飲みよっですよ。負けちゃいましたもんねぇ。
紫　……。
陽子　あ、清峰ね…、
緑　はい。解りました。えぇ、大丈夫です。
紫　負けたとねー？　もぉ～！
緑　待っとりますけん。どうも。（電話を切る）
紫　ウチの計画が狂ってしまうたいね～！
友樹　一足遅かったごたんね。
紫　なんね、もう。
緑　清峰とあんたの自立は関係なかやろうが。
紫　せっかく機嫌のよか内に話ばしようと思っとったとに！
陽子　でも大事な話だから、お互いに落ち着いてる時がいいよ。
紫　うんにゃ。あの親父は、娘より野球が大事かっさ。
友樹　そがん、お前…、
陽子　しっかりした理由でもない限り、普通の親は反対すると思うしね。
紫　そいば説明する前に、あの親父が話聞かんとやもん。
貴志　そいは、紫ちゃんに出て行って欲しくなかけんやろう。
友樹　おい達も寂しかやっか。
紫　知らん。
貴志　でも、それなら向坂さんが一緒だと、少しは旗色いいかもしれませんね。
陽子　そっかなぁ…、
友樹　おい、陽子ちゃんが東京行く時も反対したとに。
緑　ぶはははは。
陽子　そうだったね。
緑　そうやった。凄まじい反対やったもんね。
友樹　当たり前やっか。そがん、東京は危なかし、一人で行くなんか、信じられんよ。
紫　バカやねぇ、友樹君。
陽子　でも、見送りに来てくれたじゃん。
友樹　そりゃね、行ったけどさ…。
緑　あの後、『このまま陽子ちゃんば連れて逃げれば良かった』って言いよった。
貴志　ははははは。
陽子　何で逃げるの？
紫　あはははは。
友樹　何となく、…危険な気がして、
紫　友樹君が一番危険ばい。
陽子　あはは。そうかもね。
友樹　ひどさ。
貴志　先輩、女は残酷なもんですよ。
紫　じゃあ、ウチが東京行く時も、盛大に見送りしてね。
友樹　知らん。勝手に行け。
紫　ああ、父ちゃんもそんくらい簡単にＯＫしてくれんかね。
貴志　でも、おじさん機嫌よかったよ。
友樹　酒飲んどる時に話してもなぁ。
緑　じゃあ、夏の甲子園まで待って話せばよかたい。
紫　ああ？
緑　また長崎県勢が頑張ってくれるかもしれんよ。
紫　そがんと待っとられん。
陽子　だって、来年の話でしょ？　まだゆっくり時間あるじゃない。
紫　そがん事なかよ。　就活あるし、夏には下見に行きたかし。

緑　下見ぃ？　そがん事言うて、ただの旅行やろうもん。
紫　姉ちゃんには解らんさ。そいけん、一番頼りになるとは陽子ちゃんだけって！
陽子　そりゃ、私でお役に立てればいいけど…。私、もう東京に戻るつもりはないから。
紫　え？
貴志　え、本当ですか？
陽子　うん。
紫　嘘やろ？　ホント？　陽子ちゃん。
陽子　うん。だから、私じゃダメだと思うの。
紫　嘘やろ？　何で？
緑　紫！
陽子　ちょっと寂しくなっちゃってね。
紫　そんだけ？　たったそれだけの理由で？　そいで戻ってくると？　こがん所に！
陽子　戻るっていうか…、
友樹　こがん所って、お前。
紫　何ね？　こがん所たいね！　陽子ちゃん、考え直した方がよかよ！
　そいに、ウチも困るもん。
陽子　……。
緑　あんたには関係なかやろうもん。
紫　だけん、姉ちゃんには解らんさ！
緑　ああ、解らんね。皆だってそがん事聞かされても迷惑ばい。
　手伝わんとやったら、あんたあっちに行きよ。
紫　何ね、姉ちゃんはそがん偉かと？。
緑　そがん事言いよらんさ。
友樹　やめんや、二人とも。　どがんしたとや。こがんめでたか日に。
紫　おめでたかとは友樹君だけやろうが！
緑　紫！
陽子　協力してあげたいけど…、
紫　じゃあ、ウチが東京行くまで東京に戻ってよ。
緑　バカか、お前は！
紫　陽子ちゃんがそがんやったら、全然説得力なんかなかたいね！
友樹　いい加減にせんや！　陽子ちゃんにも都合のあらすと！
紫　ウチにも都合のあると！
緑　お前は、ただワガママ言いよるだけやろうもん！
紫　ワガママでも何でも、ウチは、もうこがんとこ嫌とばい。帰ってきたら父ちゃんはいっつも酔っ
　払とるし、
友樹　よかやっか。　おじちゃんもそいしか楽しみのなかっちゃっけん。
紫　友樹君も酔っ払とるし。
緑　こいは関係なかやろうもん。
紫　うんざりするっさ。
緑　紫。
紫　姉ちゃんはそいでよかとやろう。でもウチはもう嫌と。
緑　そいでよかって、家族がしよる事に、そがん言い方するな。
紫　そいけん、ウチはウチの好きなごとしてよかやろう？
緑　何もできんくせに。
紫　じゃあ、ここにおれば、ウチは何の出来るごとなると？

☆　全員が、それぞれに答えきれず、沈黙する。

紫　もうよか！　もう誰もアテにせん！　ウチは好きなごとする！

☆　紫、自宅へ走り去って行く。貴志が追おうとして立ち上がる。

緑　放っとかんね！

貴志　緑さん、紫ちゃん、真剣なんだと思いますよ。だからもう少し話を聞いてあげれば…、

緑　関係なかやろ。

友樹　緑。

貴志　でも、そんなに心配しなくても、向坂さんは、今までちゃんとやってこれたんだから。

緑　無責任な事言わんでよ。

陽子　緑。私と紫ちゃんは違うよ。

緑　違うかもしれんけど…、でも、あんたは辛かったっちゃろ？

陽子　……。

緑　ウチが紫の東京行きに賛成できる訳のなかたい。

陽子　……。

友樹　なんでそがん言い方ばするとか？　陽子ちゃんは、自分の為に東京に行っとったとばい。

☆　沈黙。　自宅入り口から、鼻歌混じりの康が顔を出す。　全員が康を見る。

康　……ん？

☆　また沈黙。

康　さっきまで紫の声のしよったごたんけど。…やっぱりこの店は、一度入った人間を消す構造に…、

緑　父ちゃん。さっき谷本さんから電話のあったばい。

康　お、そうや。（店に出てくる）

緑　後で来るって。

康　うん。そうね。

貴志　谷本さんも試合見てたんでしょうね。

康　ああ、そうね。

緑　……あー、もう。（開いてる席に座る。）

康　なんや？

☆　陽子、立ち上がる。

康　…なーん、なんね、陽子ちゃん。

陽子　おじさん、急に泊めてもらって、ありがとうございました

康　なんね。そがんとは気にせんちゃよかとよ。

友樹　陽子ちゃん、気ば悪くしたかもしれんけど…、

陽子　どうして？　気を悪くしてるのは皆の方でしょ？

友樹　…陽子ちゃん。

緑　だいも、そがんこと言いよらんやろうもん。

陽子　だって、

康　何ね。…おじちゃん達のうるさかったね？

陽子　違います。　そんなんじゃなくて、

康　なんや、緑。陽子ちゃんに何か言うたとや？

緑　父ちゃんには関係なか。

康　関係なかってあるもんや。どがんしたか、父ちゃんに言うてみろって。

緑　よかけん、奥で飲んだくれとかんね。

康　そがん言うなさ。今日は、お前…、清峰の…、

緑　どうせ、清峰のほうが娘より大事かもんね。

康　そがん、…そいは、どっちも大事さ…。
緑　どっちも？　どっちも何ね？
康　どがんしたとや、緑。　何でそがん、
緑　また紫の東京行きたかって言いよったばい。
康　はぁん？　そがんとは…いつもの事やろうもん。
緑　きちんと話ばせんばやろう。
康　東京も早岐も変わらん。よかや？　よう考えてみんや。
　清峰は野球の名門校じゃなかとに、あがんやって全国に行けたとばい。
友樹　陽子ちゃん、…ちょっとこっちに座らんね。（座敷の方に陽子を誘導する。）
陽子　……。
康　そうばい。皆座って聞かんか。大事かとは、場所じゃなか。何を成し遂げるかよ。
友樹　ちゃんと話ばしよう。ね？
康　そいば、今の若かモンは、東京人になれば、そいでよかと思っとる。
　長崎県人の誇りの薄れて行きよるとよ。
　見てみらんね。清峰は野球の神様ば長崎に連れて来てくれたとよ。
陽子　すごか事やろうもん。
友樹　ごめんね。　私、来るべきじゃなかったね。
康　そがん事なかよ。
　横浜？　智弁和歌山？　苫小牧？　そがんとこは名門ばい。勝って当たり前たい。
　そいが、どがんね。清峰は全国二位よ。準優勝よ。
友樹　おい、陽子ちゃんに会えて嬉しかったとよ。
康　おい達にも、出来る事はあるったい。そがん、父ちゃんは思うとよ。
　陽子ちゃんは東京で立派にやりよるかもしれん。けど、父ちゃんは、緑や紫だって地元で清峰のごとなれるっちゃなかかって思いよる。
緑　結局、場所じゃなかっちゃろ？　そがん事ばっかり言いよるけん、紫ば説得できんとさ。
康　違う。何でもそがん、都会に行けばよかって言う考えが好かんとやっか。
　よかや。お前達の名前だって、ちゃんとそがん願いば込めてつけたとばい。
　緑はグランドの芝生たいね。紫は…清峰のユニホームに入っとる色やろうもん。
緑　『むらさき』と書いて『ゆかり』って読むったいね。
康　そがん、取って付けた話はどがんちゃよか。
　親は、子供に幸せになって欲しかとやっか。友樹ば見てみらんね。立派に家庭ば持って、別に東京人にならんちゃ、幸せに生きとるやっか。
友樹　おいの話はよかよ　緑、もう一回、ちゃんと話ばしようで。
陽子　友樹君、いいから。
康　そうばい。話し合って切磋琢磨してね、（冷蔵庫を開け、ビールを二本取る）
緑　なんしよる？
康　え、何や？（ビールを隠す）
緑　そいばどこに持って行くとね？
康　なーん、父ちゃん、ちょっとビールば取りに来たとやっか。
緑　飲むなって言いよるたいね。
康　そいばってん。内藤さんの飲み足りんって言わすっちゃんもん。
緑　内藤さんじゃなかやろうもん。
康　今日だけ。今日は歴史的日ばい。今日だけ飲ませて！
友樹　おじちゃん、飲み過ぎばい。
康　友樹なら解ってくれるやろうもん。
友樹　そりゃ、おいも人の事は言えんけどさ…、
緑　…じゃあ、そいで最後ばい。もうダメやけんね。
康　おお。わかっとるよ。父ちゃんが飲むとやなかけんね。ちゃんと、明日話ば聞くけん。
緑　…うん。

貴志　大丈夫ですか？　俺、持って行きましょうか？
康　よか。大丈夫。若い人は、若い人で、頑張らんね。

☆　店の入り口が開く。

緑　……。
康　いらっしゃーい。ホラ、お客さんばい。

☆　真美が入って来る。（内藤家の次女）

真美　こんにちは。
緑　ああ、こんにちは。
康　なんやー、真美や。
真美　うん。えへへへへ。
康　父ちゃんと母ちゃんは奥におるばい。
真美　うん。迎えに来たと。
康　まだ良かやっか。ゆっくりさせてやらんね。
真美　けどね、早う帰らんば、晩御飯のあるけん。
康　なーん。今日は晩御飯なんか作りよるだんじゃなか。
真美　おじちゃん、酔っ払っとるっちゃろ？
康　おいだけじゃなかさ。こい（ビール）はお前のお父さんが飲むとばい。
真美　もー、ずるかぁ、自分達ばっかり。
康　おー、来い来い。　みんなで乾杯するぞ。
緑　…真美、何か飲むね？
真美　えー、じゃあね、コーラ。
康　ここで晩飯食って行け。
真美　えへへへへ。よかと？
康　よかよか。あ、何か作ってやれば。
緑　うん。…ホラ。（真美にコーラを渡す）
真美　ありがとう。
康　さ、行くばい。語り合うばい。
真美　ね、ね。ウチも試合見よったよ。残念やったよね。もー！横浜！
康　横浜めぇ！

☆　康と真美、自宅の方へ向かう。

緑　真美、あんまり飲ませんでね。
真美　はーい。

☆　二人、自宅へ去る。奥からは真美を歓迎する声が上がる。
友樹　おじちゃん、よっぽど横浜に負けたとの悔しかったばいね。
緑　ただの酔っ払いさ。
友樹　そいより、ちゃんと話ばしようで。
緑　何の話ば？
友樹　そいけん、…その…、陽子ちゃんの話さ。
陽子　友樹君、…それは、ちゃんと緑に話すから…。
友樹　陽子ちゃんは悩んどらすとばい。
陽子　別に、悩んでる訳じゃないよ。大丈夫だから。
緑　陽子。…ちゃんと話してくれんね。
陽子　……。

緑　邪魔なら、友樹も貴志にも席ば外してもらうけん。
友樹　…なんや、邪魔って？
貴志　あ、じゃあ、…俺、奥に…あ、じゃなくって、帰りますよ。
　　あ、でも、亜矢ちゃんは寝てますけど。…亜矢ちゃん、起きんね。
陽子　…私…、こんな大事になるなんて思ってなくて。
友樹　紫の話は別さ。
緑　友樹は黙っとかんね。
友樹　おいだって、お前らの友達やろう。
緑　そうけど、
友樹　そいに、お前だって将来のことばちゃんと考えとる訳じゃなかやろう。
緑　ウチは関係なかやろう。
友樹　おいは、ずっと言おうと思っとったと。お前も、早うおじさんば安心させてやれよ。
緑　ああ？
友樹　はっきり言わせてもらって、娘二人って言うとは、おじさんも不安かばい。
緑　何ね、そいは。結婚しろって話ね？
友樹　そうさ。お前、よか人おらんとや？
緑　お前とそがん話したくなか。
友樹　おいは友達と思うけん言うとばい。
緑　余計なお世話ばい。
友樹　おいは自分で自分の家族ば持って、改めて思うとよ。
　　親ば安心させるとは、結婚して、しっかり働くことが一番やっか。
緑　お前、働きよらんやっか。
友樹　そいは、たまたま今日、
緑　準決勝の日も、その前もおった。
友樹　たまにたいね。
緑　それに、そいは友樹の考えやろうもん。
陽子　…誰だって、ちゃんと胸張って生きてたいもんね。
友樹　そいけん、そいけんさ！　そがんなれるごと頑張ろうって言いよるったいね。
緑　頑張ろうって言われても。
友樹　今からでも遅くなか。よか人ば見つけて、早うおじさんば安心させてやれ。
緑　だけん、何でそがん話になるとか。
貴志　…あの、本当に今更ですけど…俺、席外しますから…。
友樹　貴志はどがん思う？
貴志　はい？
友樹　おいの考えは間違えとるやろうか？
貴志　え、いや、自分は…。
友樹　お前も、亜矢ちゃんと所帯ば持つとやろうもん。
貴志　…はぁ、…まだそんな事考えてませんけど、
友樹　ダメばい、お前、そがんじゃ。
貴志　はぁ。
友樹　…みんな、もうすぐ三十やろう？
陽子　もういいよ、友樹君。
友樹　三十って、…もう大人やっか。
貴志　そうですかね？
友樹　大人にならんばいかんやっか。
緑　そがんと、友樹に言われんちゃ、みんなそれぞれ解っとる。
友樹　うんにゃ。解っとらんと。解っとらんやっか、お前らは。そもそも、陽子ちゃん。
陽子　…はい？

友樹　子供とかの話は、大事か話やろ？　相手の男はどがん奴ね？
緑　友樹！
友樹　友達と思うけんが言うとばい。
緑　お前には関係なかやろう。
友樹　だって、おいは聞いてしまったとやもん。
陽子　……。
友樹　困っとる事のあるけん、ココに来たとやろう？
緑　やめろ、友樹！

☆　沈黙。

貴志　（ますます居心地が悪くなり、縋るように亜矢を起こす）…亜矢ちゃん。
亜矢ちゃんってば…。
陽子　…大丈夫だよ、杉山君。
貴志　え？
陽子　私が外に出るから。　（外に行こうとする。）
友樹　待たんね！　（陽子を追いかける。）　陽子ちゃん！　結婚さえしてしまえば、
誰も何も言わんけん。
緑　（友樹を止める）いい加減にせんか！　お前は！
陽子　ごめんね、緑。
緑　謝らんちゃよか。
友樹　だって、おいは陽子ちゃんに幸せになって欲しかとやもん。
陽子　幸せ？　幸せって何？　どんなこと？
友樹　だけん、きちんと結婚してさ…、
陽子　友樹君、幸せな話してくれなかったじゃない。
友樹　…陽子ちゃん。

☆　陽子、床に置きっぱなしのバッグを取る。

友樹　帰るとね？
陽子　一人になりたいの。

☆　陽子、店の出入り口から外へ。

友樹　……。
緑　……。
友樹　緑、
緑　お前は、バカか？
友樹　だって、
緑　ホントに、…お前は…。
貴志　…向坂さん、何があったんですか？
友樹　そうばい。何があったとや？
緑　聞いてどがんすると？
貴志　…そうですよね。
友樹　相談くらい乗れるやろう！　もう高校生の頃とは違うとばい！
緑　違うけんが、…簡単にいかんとやろう。
友樹　おい、…信じられんとさ。陽子ちゃんが…赤ちゃんの出来たって、
緑　貴志の前で、ペラペラ喋らんと。
友樹　…あ。
貴志　…いや、さっき口走ってたじゃないですか。俺、聞いちゃいましたよ。

緑　お前は、黙っとった方が陽子のためばい。
友樹　だって、…心配かとやもん。普通子供ができたって事はさ、喜ばしか事やろうもん。相手の男だって、一緒に帰って来てもよかくらいやっか。
緑　…そいけん…、陽子が話すまで待っとけばよかたいね。そがんホイホイ聞くなよ。もう大人なんやろ？　お互いにさ。
貴志　そうですよ。
友樹　おいの…おいの陽子ちゃんとに。
貴志　先輩。　違いますよ。
友樹　どがん男やろうか？　よか男やろうか？
緑　そがん事、陽子に言うなよ。
友樹　陽子ちゃんが…妊娠。
貴志　先輩…。向坂さんも大人ですからね。
友樹　どがん男が、あの可愛かった陽子ちゃんば汚したとや。
緑　だけん、陽子だってちゃんとその男に惚れてやっとるとさ。
友樹　やっとるとか言うなよ。
緑　やっとるけん出来たとやろうもん。

☆　真美が自宅の入り口から店を覗く。

友樹　お前、お前、そがん言い方あるか。
緑　お前こそ、おめでたすぎて呆れるばい。
貴志　あ、あの、
緑　陽子は大人になったと。
貴志　先輩、先輩！
友樹　うわー、やめろ！　陽子ちゃんは、ジャージで微笑んでいた陽子ちゃんのまんまばい！
緑　お前こそ、変態じゃなかとや？　このロリコン！
友樹　なんやぁ？
緑　女子高生マニアか！
貴志　真美ちゃんがいますよ！
緑・友樹　真美？
真美　…友樹君、…女子高生が好きと…？
友樹　真美…。ち、違うばい。今のは…、

☆　続いて、房代が店に顔を出す。

房代　ごめんね、緑ちゃん。こん子の退屈するけん。
友樹　おばちゃん、今ね…、
緑　よかよ、こっちこんね。
房代　でもねぇ、
真美　はーい。（店に降りてくる。）
友樹　（緑に）おい。
緑　ウチはお客様第一なんでね。
房代　何か話しよったっちゃろ？
友樹　そう…、
緑　大丈夫やけん。
房代　あら、陽子ちゃんは帰らしたと？
友樹　今、ちょっと外に出とらす。
房代　何か、あん子は雰囲気の変わったねぇ。
友樹　…色々、あらすとよ。

房代　まだ家にも帰っとらんって言いよらしたけど、
緑　うん。そがんってね。
房代　いっちょん清峰も応援さっさんし。
友樹　そいは、…別に、陽子ちゃんは清峰ば応援しに帰ってきた訳じゃなかけんがね。
房代　気取っとらすって言うとかね。
真美　お母さん！
房代　何ね。気取っとるって言うやろうもん。
緑　ははは。
房代　うったちのうるさ過ぎたっちゃろうかね？
緑　よかとよ。気にせんで。
房代　何か、申し訳なかったよねぇ。
緑　ごめんね。気ば使わせて。もうあん子も帰るって言いよるけんが。
房代　いや、そがんじゃなかとけど。
真美　もう、お母さん、奥にいかんね。
房代　あら、何ね。
真美　人ん家に上がりこんどるとは、お母さんも変わらんたい！
房代　お母さん達は、清峰ば応援しよるとやもん。（自宅の方へ向かって）　あ？なんて？
緑　あら、ビールの無くなったってばい。
房代　ああ、（冷蔵庫へ向かう。）
緑　ごめんねぇ、緑ちゃん。陽子ちゃんにも、うるそうしてごめんねって言うとって。
房代　（房代にビールを渡す）　そがん事なかよ。楽しんでって下さい。
緑　ありがとうね。なんか余計な事ば頼んでしまったかと思って、心配しとったとよ。
真美　え？
房代　ホラ、今度ウチの娘の結婚するやろう？
緑　早う、行きって！
房代　何ね。　姉ちゃんの保険の話ばしよるとやろうもん。
真美　姉ちゃんは関係なかやろうもん。
房代　もぉ、こん子は口やかましかとやもんねぇ。
緑　ははは。真美、姉ちゃんが結婚するけん寂しかっちゃろ？
真美　別に。そがん遠くに行かすわけじゃなかもん。
房代　ねぇ、こがん調子よ。
緑　よかけん、早う行かんね！
房代　あー、はいはい。　（自宅の出入り口から、自宅の方へ引っ込む）
真美　もう、酔っ払って、バカじゃなかやろうか。
緑　ははは。
真美　何ね？
緑　いや。どこの子っちゃ、言うことは同じと思ってさ。
友樹　緑。ここはおいに任せて、ちょっと陽子ちゃんば見てこんや。
緑　何で任せんばいかんとか。
真美　お友達、どがんかさしたと？
友樹　真美、…ちょっとの間、大人しくしとかんや。
真美　なーんね。　酔っ払い。
友樹　大人には、今しかないって時があるとばい。
緑　…一人になりたかって言いよるたいね。
友樹　バカ。陽子ちゃんがどがん気持ちでここにおるか考えてみらんや。
緑　お前の方が考えろ。
友樹　だけん、…おいじゃダメとやろう？
真美　どがんさしたと？
緑　なーん、ちょっと喧嘩しただけたい。
真美　ああ、解る。ウチもお母さんとしょっちゅう喧嘩するけん。

友樹　子供の喧嘩とは違うとばい。
真美　子供の喧嘩じゃなか。ウチにとっては大事なことばい。（立ち上がり）ウチが見てきてやるけん。
緑　よかよ、真美。
真美　（店の出入り口から外へ行きながら）きちんと話し合わんば。（外へ）
貴志　…若いって、いいですね。
友樹　なぁ。
緑　とにかく、もう二度と陽子に余計な事ば言うなよ。
友樹　……。
緑　解ったとや？
友樹　余計な事じゃなかかもしれんやっか。
緑　この期に及んで、お前は…、

☆　真美、外から店へ戻る。

真美　もう少ししたら戻って来るって。
緑　ああ、ありがとう。
真美　ずっと、小森川ば見よらした。
緑　……。
真美　ウチもね、お母さんと喧嘩した時は、小森川に向かって叫ぶっちゃん。
緑　ははは。何の喧嘩ばすっと？
真美　どこの高校を受験するかって。
緑　ほー。
友樹　そいは、…今度相談に乗ってやるけん。
真美　友樹君、ウチの父ちゃんと同じやね。
友樹　え？
真美　ウチは清峰ば受験するって言うたと。
緑　清峰？　えらい遠かね。ってか、あそこは校区外じゃなかとね？
真美　え？　何？　それ？
緑　いや、校区が別れとるけん、
真美　えー？　じゃあ、ウチ清峰行かれんと？
貴志　でも、最近、校区はなくなったんですよ。
緑　え？　ホント？
貴志　確か、どこでも行けるんじゃないんでしたっけ？　受かれば。
真美　ホント？　じゃあ、行ける？
緑　や、そりゃ、先生に聞いてみなさい。
真美　もー、行けんとやったら死んだがマシ！
友樹　何て言いよっとか。大袈裟か。
真美　そんくらい行きたかと！
貴志　こっからやったら、相当遠かよ。
真美　知っとるよ。
緑　にしても、何で清峰ね？
真美　ウチ、清峰行って、野球部のマネージャーになるっちゃん。
貴志　マネージャー？　そりゃ、また。絶対競争率高いよ。
真美　わかっとるよ。でも、絶対なる！　そんで、…有迫さんのユニホームば洗濯する！
友樹　そりゃ、動機が不純かねぇ。
真美　ほんと、友樹君はウチのお父さんのごたる。
　　そいで、いっつも喧嘩しよるとよ。清峰まで通う交通費ば出せんって言われると。
貴志　確かに、ホントに遠いもんね。
友樹　バカかお前。
真美　バカじゃなか。だって、せっかく佐世保におるとよ。バスで行ける距離におるとよ。

友樹　もっと現実的に考えんや。
真美　現実的たいね。別に外国行きたかって言いよる訳じゃなかとよ？
貴志　受かればよかけどね。
真美　うん。えへへへへ。そいけん、勉強も頑張るっちゃん。
友樹　そいより、ウチの母校に行って、野球部ば盛り上げんね。
　　ここからやったら歩いて行けるし。
貴志　あんまり野球で有名じゃなかとこころやけど。
真美　いや。野球の強かとこころに行く！
貴志　さすが、内藤さんとこの娘さんですね。
真美　そいけんね、緑ちゃん。
緑　　ん？
真美　色々教えて欲しかっちゃん。マネージャーってさ、やっぱり不器用やったらダメよね？　ちゃんとスコアも付けれんばダメよね？
友樹　その前に、清峰は無理やろうけどな。
真美　無理じゃなか。諦めたらダメとよ。
友樹　親がダメって言うもんは、どがんしょうもなかやっか。
真美　なんねー！

☆　店の入り口が開き、陽子が店へ戻ってくる。

緑　　マネージャーの事なら、あの姉ちゃんにも聞かんね。
陽子　え？
緑　　高校の時の野球部の、優秀なマネージャーやったとばい。
真美　ホント？
緑　　ね。
陽子　…優秀じゃなかったけど…、
真美　よかったぁ。ウチ、ホントはマネージャーってよく解っとらんけん、ちょっと不安やったと。今から特訓しとかんば事ってあるやろか？
緑　　特訓ねぇ。何かあるか？（陽子に）
陽子　…そうね、うーん。沢山あるね。
真美　うわー。頑張らんばね。やっぱり大変ですか？
陽子　……ううん。
緑　　死ぬ気で選手ば応援せんね。
真美　そいは、誰にも負けん！
陽子　それが一番だよ。…それしかなかったもん。
真美　ウチね、夢のあるっちゃん。有迫さんたちがグラウンドに走っていく姿ば、ベンチから見送りたかと。そのために、きちんとスコアもつけれるようになるし、
　　絶対によかマネージャーになる。お料理も練習するし。いつも笑顔で、皆ば元気付けられるようにするし。そいで練習後のグラウンドから、有迫さんと夕日ば眺めるっちゃん。
緑　　……。
陽子　……。

☆　緑と陽子、ふとマネージャー時代を思い出す。
　　過ぎ去ってしまった青春を思う。　そして、遠くなったあの頃の自分達を、
　　真美の姿に重ねた。

友樹　真美、人生はそがん甘かもんじゃなかとよ。
真美　もー、友樹君、うるさか！
友樹　別に、お前ば傷付けるつもりで言いよるっちゃなかさ。そいばってん、親の言うことは聞いとった方がよか。おいは皆にきちんとした人生ば歩んで欲しかっさ。

貴志　いいじゃないですか。高校くらい、どこ行ったって。
友樹　そうや？　そがん理由で高校選んだら、親に申し訳なかやっか。
　　そいよりも、親の言う高校に行った方がよかとって。
貴志　俺らの時代に清峰が強かったら、先輩どうしました？
友樹　え？
貴志　本気でやる気があれば、清峰だけじゃなくても、波佐見（はさみ）だって、日大（にちだい）（両校とも、長崎県の野球強豪校）だって行けたじゃないですか。
友樹　…野球は、趣味みたいなもんたいね。
貴志　だったら、真美ちゃんの真剣な気持ちを否定するのは間違ってますよ。
友樹　否定って、そがん大袈裟なモンじゃ…。
貴志　肝心な時に選び損ねてるんですから。
友樹　どがん意味や？
貴志　先輩が考えてることだけが人生じゃないって事ですよ。
真美　何ね？　どがんしたと？
緑　いや、何でもなかよ。　真美、奥に行っとかんね。
真美　ウチのせい？
貴志　先輩には趣味でも、俺は真剣でした。

☆　貴志が立ち上がり、友樹の前を通り過ぎる。野球で負った怪我の後遺症が残ってしまった足を、引きずるように歩く。

友樹　おいだって、真剣にしよったよ。…おいだって、真剣に考えとるよ。
真美　友樹君、ごめんね。ごめんね。
緑　友樹、ホラ。水ばやるけん。
貴志　どうせ、人生なんかたかが知れてるんですよ。だから、好きにやった方がいいよ。
　　真美ちゃんも。
真美　…うん。
緑　奥に行っとき。大丈夫やけん。

☆　緑、真美を連れて自宅の入り口へ。

真美　ウチがお父さんに似とるって言ったけん、怒ったっちゃなかとよね。
緑　あはははは。怒っとらんよ。酔っ払っとるだけさ。
真美　ホント？
緑　ホントホント。あ、そいから、真美が入学する時は、有迫君は卒業しとるばい。
真美　えー？　何で？
緑　え、あの子は三年生やろう？
貴志　そうですね。
真美　じゃあ、ダメたいね～！
緑　でも、ＯＢなら会える可能性もあるばい。
真美　……卒業…。じゃあ、せめて有迫選手が触ったものでも触れれば…、
友樹　そうさ。どうせたかが知れとるさ。
貴志　…一般論ですよ。
友樹　真美、ごめんな。
真美　ううん。友樹君、元気出してね。

☆　真美、自宅へ去る。

友樹　ははは。

貴志　先輩、本当はもっと野球やりたかったんでしょ？
友樹　おいの実力じゃ、こいが限界ばい。
貴志　…。
友樹　いつの間にか、…おいは説教臭くなっとったとばいね。
貴志　もう一度、高校時代に戻りたいと思いますか？
友樹　え？
貴志　向坂さんも。
陽子　え、私？
貴志　緑さんも。
緑　さぁ、考えたこともなかね。
貴志　俺も考えたことなかったんですけど、
友樹　俺は、あの頃が一番楽しかった。
貴志　今考えると、ホントにそうですね。
陽子　…行けるといいね、真美ちゃん。
貴志　若いっていいですよね。
緑　ウチが中学の時って、何ば考えとったっけなぁ。
貴志　マジで思いますよね。俺、何であんな野球弱いところに行ったんでしょう？
友樹　…おい達の頃に…清峰が強かったらか…。
貴志　先輩はすごいと思いますよ。
友樹　へ？
貴志　しっかりお店も継いで、ちゃんと結婚もして。だから、つい真美ちゃんの肩を持っちゃったんですけど、
友樹　…そがんじゃなかよ。
緑　まぁね。友樹の親孝行はこの辺では語り草やけん。
陽子　親孝行ね。
友樹　…友樹君、ごめんね。
陽子　何で、…陽子ちゃんが謝ると？
友樹　……。
陽子　陽子ちゃん。
友樹　…ごめんね。
陽子　友樹　陽子ちゃん。（陽子の手を握る）
陽子　は い。
友樹　大丈夫ばい。大丈夫。
陽子　え？
友樹　おいがおるよ。
貴志　先輩、…それはちょっと、
陽子　…ありがとう。
緑　……友樹は、…いい奴よ。
陽子　うん。…ずっと、私にとってはいい人だったよ。
友樹　……いい人でよかけん。
緑　うざかけど、…いい奴よ。
陽子　うん。
友樹　よ、陽子ちゃん。（手に縋る）
陽子　……。
緑　（二人の間に入って）いい加減、離さんね。
陽子　友樹君ってば、
緑　いい加減にせんか。
貴志　先輩、本当に高校の時と変わりませんよね。
緑　ホントばい。
貴志　向坂先輩の嫌がる事ばっかやってましたもんね。

陽子　…懐かしい。
貴志　え？
陽子　向坂先輩だって。
友樹　嫌がりよったとね、陽子ちゃん。
緑　手ば離さんや。
友樹　嫌ばい。やっと今、堂々と握れるようになったとやもん。
緑　今やけん、問題のあるっちゃろうもん。

☆　一同の笑いの中、緑が友樹の手を陽子から離す。　その笑いが落ち着いた中。

友樹　戻ってくればよか…。
陽子　……。

☆　沈黙の中、店の出入り口が開く。

緑　…いらっしゃいませ。

☆　恵子（友樹の妻）が大きな荷物を持って店へ入って来る。
友樹以外が、全員ポカンとそれを見ている。

恵子　やっぱりここにいた。
緑　あれ、
友樹　お前…、
緑　どがんしたと…？
恵子　取り敢えず、一旦戻りました。
友樹　……。
恵子　お店開いてなかったから、ここだと思った。
緑　……何ね…？
恵子　緑さん。すみません、ご迷惑かけて。
緑　や、別に、いつもの事やけん…、
恵子　…そうですね。二人にはいつもの事でしょうけど…。
緑　え、…って言うか、…何？　恵子さん、その荷物、
友樹　もう帰ってこんかと思っとった。
恵子　……。
友樹　…戻ってきてくれるとや？
恵子　それを話し合いに来たと。
友樹　…そうや…。ちょっと、待っとかんね。

☆　友樹、自宅の方へ歩いていく。　緑、慌てて追いかける。

緑　なんね、友樹、
友樹　…うん。　奥から荷物取って来る。
緑　いや、そうじゃなくて…、
友樹　…あ、ビールは…後で届けるけん。（自宅へ去って行く）
緑　ビールは…そりゃ、早か方が助かるけど…、
陽子　あ、…あの、渡部君の奥様ですか…？
恵子　一応。
陽子　あ、どうも。
恵子　電話したとですけど、いっちょん出らん。
緑　ああ、アイツ、相当飲んどったけん…。

恵子　そうじゃないかって思ってたんです。
緑　な、何かあったとね？
恵子　あの人は、…別にウチじゃなくても良かとです。
緑　え？
恵子　ウチにおるより、…ここが好いとらすごたん。
緑　…あ、まぁ、ここは友達も来るし、
恵子　ウチより、緑さんの方が良かごたん。
緑　はぁ？　ちょっと、恵子さん…、
恵子　そいば確かめに戻って来たとです。
緑　確かめるって、ちょっと、

☆　友樹が荷物を持って、店へ戻ってくる。

友樹　そいぎん、…帰るばい。（恵子を連れて、店の出入り口の方へ歩いて行く。）
恵子　はい。
緑　ちょ、ちょっ、
友樹　悪い。あとで連絡するな。
緑　…え、…うん。
恵子　別に、ここで話して良かとよ？
友樹　バカ！　何ば言いよるとや。帰るばい。
恵子　バカじゃなか！　ウチがどがん辛かったか、こんまま緑さんに聞いてもらってよかとやけん！
友樹　そいけん、コイツ…緑は関係なかって、
緑　けけけけ恵子さん。何の話ばしよるとね？
恵子　いつもいつも、何かあれば『緑、緑』って！
友樹　言うとらんやっか！
緑　やめんね！　何でそがん話になっとるとね！　迷惑ばい！
友樹　おいの方が迷惑しとるさ！
緑　何てか？
恵子　ウチが家ば出ても、こがんしてここにおるとが証拠じゃなかね！
緑　恵子さん。
友樹　恵子、そがんじゃなかって、
恵子　ウチに子供ができんとは、ウチのせいじゃなか！
友樹　やめんや！　こがん所で！
恵子　そがん欲しかなら、緑さんに産んでもらえばよかたいね！
緑・友樹　いやばい！！
緑　冗談じゃなか！
友樹　お前、何て事ば言うとや！　バカも休み休み言え！　とにかく、ホラ、帰るばい！
緑　何のあったか知らんけど、ちゃんと話して誤解ば解いて！　頼むけん！
恵子　本当に誤解なんですか？
緑　全くの誤解です。
友樹　ホラ、（投げ捨てたられた恵子のバッグを持ちながら）　帰るばい！
陽子　陽子ちゃん、…またゆっくり話そうね。
友樹　え、あ、うん。あの、色々ありがとう。
緑　よかとよ。友達たいね。
友樹　…お前、大丈夫とか？
緑　大丈夫。騒がせて悪かったね。また来るけん。

☆　友樹、恵子を促して店を出る。

陽子　……。

緑　…なんやったとかな？
貴志　先輩、…実は、ずっと店を閉めてたんですよ。あ、俺も人に聞いたんですけど。
緑　は？　だって、ウチには配達に来よったよ？
貴志　あ、はぁ、配達は受けてたみたいですけど…、
緑　恵子さんの言い分、全く納得いかんとけど…。
陽子　やっぱり誤解されるんじゃないの？
緑　え？
陽子　だって、…やっぱり、ねぇ…。
貴志　そりゃ、まぁ、
緑　何ば？　だって、あいつは友達ばい。
陽子　私達は、ホラ、緑と友樹君の仲を知ってるからね。
緑　あがん、口開けば『陽子ちゃん、陽子ちゃん』って、
陽子　それは、私がいる時はそうかもしれないけど、
緑　冗談じゃなか！
貴志　…でも、色々大変なんじゃないんですか？
緑　何で言ってくれんとやろうか？
貴志　そりゃ、…言えないでしょ。
緑　何で？　大体、アイツはここに来て騒ぎよる場合じゃなかったっちゃなかとね？
貴志　だからですよ。だからずっと来てたんだと思いますよ。
緑　そがん…、
貴志　…まぁ、…誤解なんですから、大丈夫ですよ。
緑　……。
貴志　さ。じゃあ、俺、本当に帰りますね。亜矢ちゃんは、夜迎えに来ますから。
緑　…わかった。
貴志　大丈夫ですよ、緑さん。
陽子　あ、杉山君。
貴志　はい。
陽子　ありがとうね。
貴志　…俺も、会えて嬉しかったです。

☆

自宅の入り口から、内藤**晧次朗**（こうじろう）（房代の夫で、真美の父）が店に顔を出す。

晧次朗　友樹～。
緑　あ、友樹は帰ったばい。
晧次朗　え？　ホントや？　何や、今日は一晩中飲むって言いよったとに。
緑　まぁ、…色々あるとやろう。
貴志　俺も帰ります。
晧次朗　何ね。亜矢ちゃんば、そがん霰もなか格好で置いて行くとや？
貴志　だって、起きないんですもん。
晧次朗　亜矢ちゃん、貴志君の帰るって言いよるばい。
貴志　そんくらいじゃ起きませんよ。
晧次朗　亜矢ちゃん、ホラ。ダーリンの帰るってばい。
貴志　亜矢ちゃん。夜に迎えに来るけんね。
晧次朗　亜矢ちゃん～。
緑　…亜矢ちゃん。こまとまの選手のおるばい。
亜矢　（起き上がる）えええええええ？
貴志　亜矢ちゃん…。
亜矢　どこ？　（側に居た貴志に詰め寄る）どこ？　どこね、田中君は！！！
晧次朗　…亜矢ちゃん。

亜矢　将大（田中選手の名前）はどこにおるとね！！！

☆　店の出入り口が開く。

緑　いらっしゃい。

亜矢　将大！！！！　（座敷から飛び降り、裸足で出入り口へ走る。）

☆　誰も入ってこないが、ドアのところから恵子と友樹の揉める声が聞こえる。

亜矢　…将大じゃない…！

貴志　当たり前やろう。（亜矢の靴を持って行き）早う、履かんね。

緑　何や？

皓次朗　どがんしたとや？

☆　皓次朗が様子を見に行こうとすると、店の入り口から友樹が飛び込んでくる。

友樹　ちょっ、手伝って…！

貴志　え？　どうしたんですか？

恵子　（声のみ、店の出入り口の外から）離さんね！

友樹　恵子！　いい加減にせんや、お前は…！　（そのまま、店の入り口から消える。）

☆　貴志、友樹たちを追いかける。　残りのメンバーは、どうしていいか解らず、動かない。

友樹　（声のみ）いたたた、やめんや！

貴志　（声のみ）恵子さん！　け、恵子さん！

恵子　（声のみ）何も解っとらんとは、あんたやろうもん！

友樹　（声のみ）恵子！　ちょっと、

☆　店の入り口から貴志だけが戻る。

貴志　何か、恵子さんが…、

皓次朗　何しよるとや、アイツらは。

陽子　まだ…、暴れてるの？

皓次朗　暴れよる？　だいが？

緑　や、暴れてるって訳じゃ…、

貴志　完全に暴れてますよ。　女を甘く見るなって、叫んでます…。

☆　外から友樹の悲痛な声が響く。

友樹　だいか～！

皓次朗　おおお、夫婦喧嘩ばいね。（自宅の入り口へ行き、奥にいるメンバーに呼びかけながら、自宅へ去って行く。）　おーい！　面白かぞ！

緑　あ、おじちゃん！

☆　自宅の方が騒然となる。

貴志　ちょっと、俺、見てきますね。

緑　何ね、もう！　はた迷惑な奴らやね。

亜矢　何ですか？　誰が夫婦喧嘩しよると？　（外へ行こうとする）

緑　そがん、面白ろがったらいかんよ…、

☆　真美、店の方へ走ってくる。

真美　ウチの靴！　靴！　ねねね、夫婦喧嘩ってよ！
緑　コラ、真美！
真美　あ、亜矢ちゃん！　早う行こう！　きゃー！！
亜矢　きゃー！

☆　亜矢と真美、勇んで外へ。　続いて康が、自宅の方から笑いながら登場。

康　やれやれー！　もっとやれー！
緑　父ちゃん！
康　お前らも来い！　あはは！

☆　内藤夫妻は、自宅の玄関から外に出た様子で、中は静まり返り、緑と陽子だけが残される。

陽子　ホント…、賑やかだね。
緑　揃いも揃って、バカじゃなかか。
陽子　行かないの？
緑　いや、でもねぇ…、
陽子　心配でしょ？
緑　……。
陽子　行こう。　ね？
緑　あんまり関わりたくなかけど…。

☆　緑と陽子、外へ出ようと歩き出す。　その時、店の電話が鳴る。

緑　ああ、もう。あ、先に行っとき。
陽子　うん。

☆　緑、電話を取り、陽子はそのまま店の出入り口から外へ出る。

緑　はい。『居酒屋　盗聖王』ですけど？　ああ、谷本さん？　はい。よかですよ。はいはーい。

☆　緑、電話を切り、外へ行こうとする。　ふと、陽子のバッグが目に入り、ゆっくりと手を伸ばす。　バッグから白い布がはみ出ており、それを他意なく引っ張る。すると、血の付いたシーツが出てくる。
緑　……。

☆　人の気配を感じ、店の出入り口を見ると、外へ行ったはずの陽子が立っている。

陽子　…雨の降りよるよ、緑…。
緑　陽子…。
陽子　……。
緑　…あんた、…コレ。
陽子　どこに捨てたらよかか解らんやったけん…。
緑　コレは…何ね？

陽子　戻れると思っとったけど、もう…気が付いたら十年経っとったとね。
緑　陽子、（陽子に近付こうとする。）
陽子　そこにおって。ちゃんと話したかけん。こっちの言葉やったら、ちゃんと話せると思うけん。
でも…話してしもうたら、もうあんたの知っとるウチじゃなくなると思う。
緑　……。

☆　陽子、緑が床に置きっぱなしにしたシーツの元へ、ゆっくりと歩いていく。
そして、膝をつき、それを愛しそうに畳み始める。

陽子　気が付いたら、あの人は動かんごとなっとって、ウチは何も考えきれん
ごとなって…。このまま、時間が止まるっちゃなかかって。
でも、あの人にはちゃんと家族がおって、居なくなっても探してくれる人がおる。
…本当に、時間は勝手に進むとね…。どうしようもなくて、…なんか、全然どうしていいか解らんで…。
緑　……。
陽子　清峰。ちゃんと全国版のニュースで流れよったよ。
長崎県勢初の快挙。春の甲子園決勝戦進出。…つきっ放しのテレビから、佐世保の名前が聞こえてきて…。
緑　…陽子…。
陽子　あの夕日しか思い出せんやった。
緑　……。

☆　陽子、シーツをバッグへ仕舞い、立ち上がって緑の正面を向く。

陽子　今、やっと…、緑の前に立っとるって…実感できる…。ね、緑、カウンターに
入って。
緑　え？

☆　緑、戸惑いながらもカウンターへ入る。　陽子はバッグを手にして、自宅側の入り口へ向かう。

陽子　（バッグからボールを出す。）　これ、あん時のウイニングボール。
緑　え？
陽子　どうしようもなくて動けんやったウチの前に、このボールが転がって来たと。
緑　…どうしようもなかとね？
陽子　ウチが今から行くところには、コレは持って行けん。
緑　……。
陽子　緑に渡そうと思って、…必死で帰って来たと。
緑　……。

☆　陽子、ボールを掲げる。

陽子　高校の時さ、ここでこがんしてキャッチボールしよって、おじちゃんに怒られた
よね。
緑　…おう。　（緑も手を挙げる。）　勝手に店の方に入ったらいかんってね。
陽子　…そうしてると、居酒屋の女主人もお似合いばい。
緑　ははは。
陽子　緑。ウチ達のウイニングボール。

☆　陽子が投げたボールが、ゆっくりと緑の手に飛び込む。

陽子　もう、上手く投げきらんね。
緑　相変わらず、下手くそやね。
陽子　…ずっと緑と居ればよかった。あの坂道を下って、…どこでどがん道ば間違えたとやろう。
緑　ウチは、…ずっとここにおるよ。
陽子　ずっと緑に怒られ続けてたら、…もっと上手に出来たかもしれんとに…。
緑　……。
陽子　みんなに宜しく伝えとって。
緑　…どがんもならんとね…？
陽子　内藤さんに、お母さんに連絡できんでごめんって。　おじちゃんに、夏の甲子園、一緒に行けんでごめんって。紫ちゃんに、…役に立てんでごめんって。
緑　よかけんが、
陽子　友樹君に、
緑　……、
陽子　マネージャー、出来んでごめんって。
緑　…伝えとく。
陽子　緑に…ごめんって…。
緑　……。（頷く）
陽子　伝えに来たとよ。
緑　…うん。

☆　しばらく、二人黙っているが、陽子が荷物を持ち、奥へ行こうとする。

陽子　コッチ（自宅の玄関の方）から出るね。（そのまま、真っ直ぐに奥を向き、緑に背を向ける）
緑　陽子。

☆　呼び止められ、陽子がゆっくり振り返る。　緑がウイニングボールを掲げる。
陽子は静かに頷き、そのまま奥の自宅の方へ。
しばらく、長いような、重苦しい沈黙が流れる。

☆　外から、貴志と晧次朗が戻ってくる。

晧次朗　真美の教育上よくなかやろう。
貴志　女性は、何でああいうのを見て喜ぶんでしょうね？
晧次朗　緑ちゃん、ありゃ、いっとき納まらんばい。
貴志　もう、皆飲み過ぎですよ。野球観戦みたいになってますよ。
晧次朗　やっさん達は、しばらく見よくって言うけん、置いて来たばい。

☆　緑は何も答えない。　晧次朗と貴志は、先程までの夫婦喧嘩にすっかり興奮し、
緑の様子に気付かず喋り続ける。

貴志　みんな、ひどいですよ。
晧次朗　小森川の鯨が助けてくれればよかけどね。
貴志　鯨ですか？
晧次朗　そうばい。昔っから鯨は大活躍やったっちゃけん。火事現場で、人ば助けらしたしね。
貴志　鯨が？（笑）
晧次朗　そいけん、鯨は人の姿で現れらすとやけん。
貴志　メチャクチャじゃないですか。
晧次朗　早岐のモンにしか解らんよ。鯨は早岐のモンしか助けんけんね。
貴志　あ、じゃあ、俺も無理っすね。
晧次朗　そいばってん、ありゃ…、亜矢ちゃんも結婚したらすごかばい。

貴志　ええ。アレが女性をないがしろにした結果と言うならば、…俺、一生、亜矢ちゃんを大事にしようと思いました…。
皓次朗　…そうばいね。おいも、…奥方を大事にせんばね。
貴志　…先輩は大丈夫でしょうか？
皓次朗　まぁ、…夫婦喧嘩は…鯨も食わんやろうしな。
貴志　そりゃ、鯨は…食べないでしょ。
皓次朗　貴志君は、…亜矢ちゃんの何ば食べるとね？
貴志　（苦笑）内藤さん…、
皓次朗　さぞかし、おいしかとやろ？　ん？　貴志君？
貴志　内藤さん、バカ、
皓次朗　生きの良かとやろ？　ん？　貴志君？
貴志　亜矢ちゃんは…、もう、内藤さん…、バカ。
皓次朗　えへへぇ。（下品な笑い）

☆　男二人がいやらしく笑い合う中、紫が店内を睨みつけ、自宅の入り口に立っている。

貴志　…紫ちゃん。
皓次朗　お、紫ちゃん。今なぁ、
紫　話しかけんで。
貴志　紫ちゃん、
皓次朗　なんね。すごかったとよ。友樹達の夫婦喧嘩ば始めてさ、
紫　そがんと知らん！
緑　…紫、
紫　ウチがこがん真剣に悩んどっとに、みんなそがんとが楽しかとね？
皓次朗　いや、そがんじゃなかけど…、
紫　皆、バカじゃなか！
貴志　紫ちゃん、話は明日おじちゃんが聞くって言いよらしたけん…、
紫　明日じゃ遅か！
皓次朗　どがんしたとね、紫ちゃん？
紫　だいもウチの話なんか真剣に聞いてくれん！　皆、清峰清峰言うて、全然ウチの事なんか考えとらんたいね。
貴志　今は、違うとよ。外で友樹先輩達が夫婦喧嘩しよるけん…、
紫　もう何も聞きたくなか！　せっかく陽子ちゃんのウチに来て、何もかんも上手く行くって思っとったとに！
皓次朗　紫ちゃん、落ち着かんね…、
紫　こがんとこ、いっちょん好かん！

☆　紫、店の入り口に向かって走り出し、そのまま外へ去る。

貴志　紫ちゃん、
皓次朗　緑ちゃん、どがんしたと？
緑　…放っといてよか。
皓次朗　喧嘩にしちゃ、…えらい機嫌の悪かね。
貴志　緑さん…、追いかけた方が、
緑　……。
皓次朗　何かあったとね？

☆　店の表で悲鳴が起こる。

康　（声のみ）紫！
友樹　（声のみ）紫！　だいか来て！　紫の小森川に飛び込んだ！

☆　店内でその騒ぎを受けた晧次朗と貴志は、驚いて目を見交わす。

晧次朗　なんや？
貴志　紫ちゃんが、小森川に飛び込んだって、
緑　……。
晧次朗　え、そがん、小森川にや？　（外へ）
貴志　俺も、行ってみます。

☆　店内に緑が取り残される。
外での騒ぎをぼんやりと聞く緑。
何もかも現実感が湧かず、ただ、手にボールを握り締めて、店内を見ている。
しばらくして、康が一人戻ってくる。
ひどく頼りない足取りで緑の前を通り過ぎ、店内の座敷に上がろうとして、
足を引っ掛けて畳に両手をつく。

康　あいた…。

☆　康、独り言のように呟いて、そのまま土足で座敷に上がりこむ。

康　緑…、緑、（緑に背を向けて座り込む）　どがんしようか…。止めようと思ったとけど…、
あいは…あっと言う間に、
緑　（座り込む康を見ながら）父ちゃん、
康　…どがんしようか…。
緑　母ちゃんが死んだときも、父ちゃんはそうやった。ウチが高校ば出る時も、父ちゃんは、後で
聞くって…、そがん事ばっかりやった。
康　緑ぃ。紫は…、大丈夫やろうか？
緑　…母ちゃんが死んだとき、父ちゃんに何て言えばよかった？　今日も、…紫に何て言えば良かっ
たとね？　…怪我した貴志に、…ウチは何て言えばよかったとね？　友樹にだって…、ウチはこ
こから人ば見とるだけで…、なんも…。
陽子に…、何て言うてやればよかったと？　ねぇ、父ちゃんって…。
そがん…いっつも飲んだくれて…。今日も、清峰、清峰って、いっちょんウチ達の話も聞かんで。

☆　緑の思いが、座り込む康の背中にぶつかって、畳に落ちる。
緑は手の中のボールを見た。

緑　…でも、…清峰が昨日勝たんやったら…、陽子は戻って来んやった…。

☆　少年が入り口に立っている。　緑も康も気付かない。
少年野球チームと一緒に募金の依頼に来た少年。　緑にとって、見覚えのない少年。

少年　…そのボール。
緑　え？

☆　不意に、緑の耳に歓声が飛び込んでくる。そして、少年を見る。
あの日、友樹にウイニングボールを投げたその選手と、少年が重なる。

少年　あの時のウイニングボールやろう？
緑　お前…。
少年　懐かしかね。また、メンバーの足りん時は呼んでね。

☆　少年が手を挙げる。　緑、手の中のボールを少年へ投げる。
少年はそれを受け取り微笑む。　二人の時間が、一瞬だけ、あの大切な勝利の瞬間に戻る。
少年は店の出入り口に向かって手招きする。　紫がびしょ濡れで現れ、少年は、そんな紫に、
優しくボールを手渡した。
そして、店の外へ消える。

緑　紫…、

☆　緑、水をかくように紫に歩み寄り、紫を抱き締める。

康　（抱き合う姉妹の姿を確認し）ゆ、紫！　（驚いて座敷を降りる。）
紫　うわーん！

☆　房代が、外から店へ戻ってくる。

房代　緑ちゃん、町内会の名簿はどこね？　あ、あら。紫ちゃんたいね。
探しよったとよ、紫ちゃん！　ちょっと、皆に言うてくるけん！　（外へ）
紫　ウチ、…ウチ、死んでやろうと思ったとけど…。うわーん！
康　紫！　（緑と紫に抱きつく）　紫！　緑！　緑！　紫！
紫　（真剣に康を突き飛ばす）　触らんで！！
康　おおおお！？　（跳ね飛ばされ、床に倒れる）

☆　外から、友樹と房代が店内に走り込んでくる。

友樹　見付かったとって？
房代　ちょっと、タオルば取りに行くけんね。　緑ちゃん、勝手に上がるよ。
（そのままの勢いで、自宅へ上がりこむ）

☆　抱き合う姉妹を見て、友樹は安心する。　そして、床に転がっている康を見付け、その体を起こす。

友樹　おじちゃん、今度はちゃんと話ば聞いてやらんば。
康　（立ち上がりながら）…そいは、俺だって、そがん…、

☆　晧次朗と真美も、店内に走りこんでくる。

真美　紫ちゃん、大丈夫ね？　本当に飛び込んだと？
紫　飛び込んだ！　飛び込んだとけど…、
真美　そいぎん、ウチも飛び込む！　（もう一度、外へ走り去る）
晧次朗　バカか！　お前、何ば言いよるとや！　（慌てて真美を追いかける）
真美　（外から、声のみ）清峰行かせてくれんなら、ウチも飛び込む！！
晧次朗　（声のみ）バカ、お前！
紫　姉ちゃん…、陽子ちゃんは？
緑　……。
紫　ウチ、陽子ちゃんに謝らんば…。
緑　戻ってくるよ。

☆　自宅から、バスタオルを持って、房代が店に現れる。
一直線に紫に向かい、紫の体を拭く。

紫　ホントに？　ホントに？
緑　うん。ここに、…もう戻って来とるとやけん。
友樹　（緑の肩を叩いて）　よかったな。紫の無事で。
緑　友樹、あの時のショートの子の来た。
友樹　は？
緑　今度は紫ば助けてくれた。
友樹　お前、何ば言いよっとや？
緑　…ずっと、うち達の側におったとばい。

☆　騒ぎの中、晧次朗は嫌がる真美を引きずり、店内に戻る。
座敷に座り込み、親子で睨み合っている。
貴志と亜矢が遅れて店内へ。　紫の無事を喜びあう。
康、内藤の姿を見付けて、大袈裟に声を張り上げる。

☆　一番遅れて、恵子が居場所がなさそうに、店に戻ってくる。

康　内藤！　今夜はもうちょっとサービスするけん、もっと飲んでいかんや。
晧次朗　いや、そいはよかけど、紫ちゃんは大丈夫とかね？
康　なーん。　大丈夫って言いよるし。明日…、しっかり話ばするし…。
晧次朗　…そうやな。今夜は飲もう！
康　よし、飲もう！　ホラ、友樹も！
友樹　や、ウチは、…ちょっと、
恵子　…飲んで行く！
友樹　え？
恵子　ウチは飲んで行く！　あんた、先に帰って店番しよかんね。（言い切って、カウンターの席に腰掛ける。）
友樹　おい、
康　そうばい。こがん日は、恵子ちゃんも飲んで行かんば！
友樹　お前、
恵子　何かあったら、ウチも飛び込んでやるとやけん。
友樹　勘弁せんや…。お前は…。

☆　恵子の言葉に、全員が、さっきの剣幕を思い出し笑う。
緑も笑い、そして、バツの悪そうな紫の背を押した。

緑　ホラ、お前。皆にもお詫びせんか。
紫　……。
緑　紫。
紫　…皆、ごめんね！
康　やー、迷惑かけたねぇ。ウチの紫が。
紫　うるさか。

☆　パトカーのサイレン

晧次朗　あら。何か大事（おおごと）になっとるっちゃなか。
房代　友樹君たちのせいやろうか？
貴志　紫ちゃんのせいでしょう（笑）

皓次朗　だいか通報さしたとやろうねー。
康　（緑に）陽子ちゃんどこ行ったとね？

☆　パトカーのサイレンが緑の耳の中で大きく響く。そして、それはそのまま通り過ぎて行った。

緑　陽子は、家に帰ったよ。
康　もっとゆっくりしてってよかったとに。
房代　ところで、紫ちゃん、どっから上がって来たとね？
皓次朗　そうばい。　みんなであがん探したとに。

☆　紫、店の外にある小森川に向かって立つ。

紫　（軽く笑って）助けてもらったと。
友樹　そいけん、誰にや？
紫　（笑う）　ウチ、生きとる間に鯨に乗れるとは思っとらんやった。

☆　全員、紫の言葉を頭で反芻し、紫に視線を集中させる。

緑と紫を除く全員　え？
紫　なんか、東京でも頑張れそうな気のする！

☆　紫は、ボールを掲げて、力強く言った。
緑以外の全員が、一斉に小森川の方を向く。
けれど、少年は、もう行ってしまった。

（音楽）

☆　長崎県佐世保市早岐　居酒屋『盗塁王』
まもなく、正式な開店時間。
紫の手には、あの日のウイニングボール。
紫の手で高々と掲げられたボールを、緑は見つめていた。
十年の月日が、緑の中でも繋がっていく。
そうして、二度と戻れない友との時を思う。

目の前には、いつもと変わらない小森川が、ゆっくりと流れている。

（閉幕）